

青苗貝塚における骨角器と動物遺体

～青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告～



平成 14 年度

奥尻町教育委員会

正誤表

誤

正

■ページ 21行 有栓弓耳型鹿角製品 → 有栓引型鹿角製品

■ページ 27行 有栓弓耳型鹿角製品 → 有栓引型鹿角製品

青苗貝塚における骨角器と動物遺体

～青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告～

平成14年度

奥尻町教育委員会

発刊によせて

1976年・78年に道々奥尻島線（道々39号線）青苗市街～奥尻空港間道路整備事業において、青苗貝塚の緊急調査・発掘が行われていましたが、その結果、貝塚からの出土遺物は質・量ともに膨大な数に達しました。

当時まだ町が、埋蔵文化調査に不慣れであったこと、出土遺物の量だけでなくその種類も多くそのため専門的調査研究が必要であったこと、さらに離島における交通手段としての道路整備事業に緊急着手しなければならなかったことなどの理由により、充分な報告が行えず、1979年3月刊行の「奥尻島青苗遺跡・図版編」のみで終わっていました。しかし、出土遺物が膨大であること、また、貝塚は掠文時代のものでは他に類を見ない質と量であることから各方面において注目を集めてきました。

近年、青苗遺跡出土の掠文時代の遺物を、国指定重要文化財に申請する動きが活発になり、それに伴って、青苗遺跡の出土遺物の所在の確認及びリスト化の必要に迫られました。青苗遺跡資料のうち、貝塚出土の骨角器は貝塚出土遺物の分類調査をしていた金子浩昌氏（当時早稲田大学教育学部）のもとで調査研究・実測図及びトレイス図作成、原稿執筆がおこなわれていました。そのため、氏と連絡を取り、打合せた結果、骨角器の返却及び町費による、骨角器と動物遺体の資料紹介と報告を兼ねた当報告書発表が可能となりました。

当報告書作成に関して、金子浩昌先生には今まで調査研究、図版作成を行っていたほか、平成14年には7・10・12月と3度にわたって来島いただき、保存資料の確認、報告書作成などの打合せや、今後行うべき動物遺体の分類整理・データ化への道筋をつけていただきました。

報告書作成に関して、金子先生のご苦労、ご支援に心より感謝申し上げる次第であります。

本報告書多くの皆様方に活用され、遺跡の重要性への理解が深められ、保存や活用の一助となれば幸いであります。

平成15年2月18日

奥尻町教育委員会 教育長 山内脩介

例 言

1. 本書は昭和51・52年に調査された青苗貝塚の概要と、貝塚出土の骨角器及び動物遺体の報告書である。
2. 本書の執筆は、第Ⅰ章を木村哲朗が、第Ⅱ～Ⅳ章を金子浩昌が担当した。
3. 実測・トレースは第Ⅰ章は木村が、第Ⅱ～Ⅳ章が金子が担当した。
4. 写真撮影・現像は津山千尋が担当した（図版1・2の写真撮影を除く）。
5. 調査及び整理、報告にあたって次の諸氏、機関にご指導、ご協力を賜った。
乙部町教育委員会、上ノ国町教育委員会、（財）北海道埋蔵文化財センター
赤沼英男、大沼忠春、種市幸雄、森広樹

凡 例

1. 本書の縮尺は以下のとおりである。
青苗貝塚周辺の地形図：1／20,000 青苗貝塚の発掘区位置図：1／1,000
グリッド配置図：1／100 土層断面図：1／50 土器実測図：1／4
骨角器実測図：1／2 海獣骨・鳥骨・貝類写真：1／3 鉄製品・魚骨写真：1／2
その他の写真については、実測図の縮尺に準ずる。
2. 表は節ごとにまとめ、基本的に節の末尾に掲載した。
3. P.L. …とあるのは、1979年刊「奥尻島青苗遺跡・図版編」の番号である。
4. 骨角器の一覧表の単位はmmである。

目 次

序	i
例 言	ii
凡 例	ii
目 次	iii
挿図目次	iv
挿表目次	v
写真図版目次	vi
第 I 章 概要	1
1 青苗貝塚の概要	1
2 発掘区と土層断面	1
3 遺物の概要	4
第 II 章 骨角器	13
1 銛頭	13
2 銛頭未成品	16
3 鹿角製銛頭の製作工程	17
4 中柄	18
5 中柄未製品	20
6 銛頭と中柄	23
7 ヤス状刺突具	25
8 鳥骨製骨針	26
9 有栓弓耳型鹿角製品	26
10 切断あるいは切り込み加工痕のある骨角について	27
第 III 章 動物遺体	31
第 IV 章 まとめ	43
1 青苗貝塚の動物遺体の特徴と擦文人の経済活動について	43
2 青苗貝塚銛頭にみる形態的特徴とその系譜	46
3 青苗貝塚出土の有栓弓耳型鹿角製品について	51
あとがき	54
写真図版	57

挿図目次

図 I - 1	青苗貝塚周辺の地形図	2
図 I - 2	青苗貝塚の発掘区位置図	3
図 I - 3	グリット配置図・貝層分布図	3
図 I - 4	土層断面図	4
図 I - 5	貝塚出土土器（1）	6
図 I - 6	貝塚出土土器（2）	7
図 I - 7	貝塚出土土器（3）	8
図 I - 8	器種別土器分布図	12
図 II - 1	銛頭（1）	14
図 II - 2	銛頭（2）	15
図 II - 3	銛頭未成品	17
図 II - 4	鹿角製銛頭の製作工程図	17
図 II - 5	中柄	19
図 II - 6	中柄未成品（1）	21
図 II - 7	中柄未成品（2）	22
図 II - 8	アイヌ期の中柄と銛頭の装着状況	24
図 II - 9	ヤス状刺突具	26
図 II - 10	鳥骨製骨針	26
図 II - 11	有栓弾型鹿角製品	27
図 III - 1	青苗貝塚出土のアシカ最小個体数の出土量	36
図 III - 2	動物遺体等出土状況図	37
図 IV - 1	青苗（擦文期）・香深井・オンネモト（オホーツク）・瀬田内チャシ（17世紀）における脊椎動物遺体の最小個体数比較図	45
図 IV - 2	縄文期よりアイヌ文化期にいたる銛頭の系譜	47
図 IV - 3	青苗貝塚出土の銛頭	50
図 IV - 4	室蘭絵鞆遺跡14号墳墓出土の「小刀柄」	52
図 IV - 5	北海道における有栓弾型鹿角製品の分布図	52

挿表目次

表 I - 1 深鉢形土器	9
表 I - 2 坏形土器	9
表 I - 3 小形土器	9
表 I - 4 壺形土器	9
表 II - 1 鋸頭	15
表 II - 2 鋸頭未成品	17
表 II - 3 中柄	20
表 II - 4 中柄未成品（1）	22
表 II - 5 中柄未成品（2）	23
表 II - 6 ヤス状刺突具	25
表 II - 7 烏骨製骨針	26
表 II - 8 有栓弭型鹿角製品	27
表 III - 1 魚骨集計表	39
表 III - 2 烏骨集計表—アホウドリ類	40
表 III - 3 烏骨集計表—ウの類	40
表 III - 4 アシカ類骨集計表（幼獣）	41
表 III - 5 アシカ類骨集計表（若獣）	41
表 III - 6 アシカ類骨集計表（成獣）	42
表 III - 7 アシカ類骨集計表（全体）	42
表 IV - 1 青苗（擦文期）・香深井・オンネモト（オホーツク）・瀬田内チャシ（17世紀） における脊椎動物遺体の最小個体数比較表	44

写真図版目次

図版1	貝塚の調査状況と貝塚断面	57
図版2	遺物出土状況	58
図版3	貝塚出土土器（1）	59
図版4	貝塚出土土器（2）	60
図版5	貝塚出土土器（3）	61
図版6	貝塚出土土器（4）・鉄製品	62
図版7	銛頭・銛頭未成品・中柄	63
図版8	中柄・中柄未成品・ヤス状刺突具・鳥骨製骨針・有栓彌型鹿角製品	64
図版9	切断あるいは切り込み加工痕のある骨角資料	65
図版10	魚骨（1）	66
図版11	魚骨（2）	67
図版12	貝殻・鳥骨	68
図版13	ニホンアシカの骨	69
図版14	L-10区海獸骨一括資料	70

第一章 概要

1 青苗貝塚の概要

青苗地区は、奥尻島南端に位置し、青苗岬が細長く突き出た地形である。岬の西側は断崖や急斜面をとおして海に迫り、東側は市街地となって、現在奥尻第一の漁業基地として栄えている。まさに3方を海に囲まれた市街地で、こうした“海”に開かれた地形が、平成5年の北海道南西沖地震で甚大な被害をもたらしたが、同時に古くから海と関わりを持つ人々が、生活をする拠点として重要な位置を占めてきた。

青苗貝塚は半島状に突き出した青苗岬の北東の基部、20~25mの斜面上に位置する。貝塚の南東側は、市街地をはさんで海を望み、南側は現在道々奥尻島線（道々39号線）が走っているが、かつては沢状地形となり、豊かな水源があったものと考えられる。また、地元の古老の話によると、かつて海は現在市街地である段丘下まで迫っていたと伝えているほか、現在の貝塚周辺にはかつてアイヌが住み、海獣やアワビ、鹿を捕って暮らしていたと伝えているなど、昔から海や沢を間近に控えた、恵まれた環境であったことが分かる。

当貝塚が初めて紹介されたのは、1931（昭和6）年に発表された深瀬春一の「奥尻島紀行」が始めである。その後、1949（昭和24）年の江差高校の調査や1950（同25）年の札幌西高校の調査を皮切に、1952（同27）年には鈴木尚ら東京大学による調査、1954（同29）年には桜井清彦らによる早稲田大学の調査が、1958年（同29）年には石川政治・千代翠らによる調査が行われ、当時、擦文時代としては珍しい貝塚の存在が注目を集めるようになってきた。

なお、当貝塚の北西側斜面には擦文期の鉄精錬関連の遺構が検出されているほか、沢を挟んだ南側である山本台地では、環壕の可能性がある“投棄溝”が、更には丁字頭勾玉やガラス玉、水晶玉などの玉類や鉄製腰刀が出土した墳墓が検出されるなど、奥尻島においても擦文時代の数多くの遺構が発見された地点である。

2 発掘区と土層断面

グリットは4m×4mで分割されたもので、南東-北西ラインはアルファベット（J・K・L・M）、南西-北東ラインはアラビア数字（7~10）で表記した。貝塚は台地南東部の斜面20~25mの標高に位置する。貝層分布図では第1~3層に分かれて図示しているが、原図の説明では貝層の上位・中位・下位での分布差を示したものとなっている。貝層は上層を中心に獸骨層、貝層が、その下位には魚骨層、さらにその下位にはウニ殻の層（記述と土層断面図との照合で9層に属すると考えられる）が堆積する傾向にある。

出土遺物はJ-7・8区を中心にして擦文土器、鉄滓、骨角器が多く出土する傾向にあり、貝層分布と遺物の特に多く分布する地点がほぼ重なることが分かる。

土層断面はJ・K-8区に設定された土層断面図を載せ、概要を以下のとおりに記す。

- 1 摂乱層 2 旧トレンチ 3 表土層 4 黄白色火山灰層（K o-dか）
- 5 黒色土層 6 暗褐色土層 7 混貝土層（遺物を含む、摂乱層か）
- 8 貝層（遺物を含む。下位に魚骨層あり） 9 黒色土層（ウニ殻などを含む）
- 10 黄橙色火山灰（B-Tm） 11 灰褐色土層 12 黒褐色土層

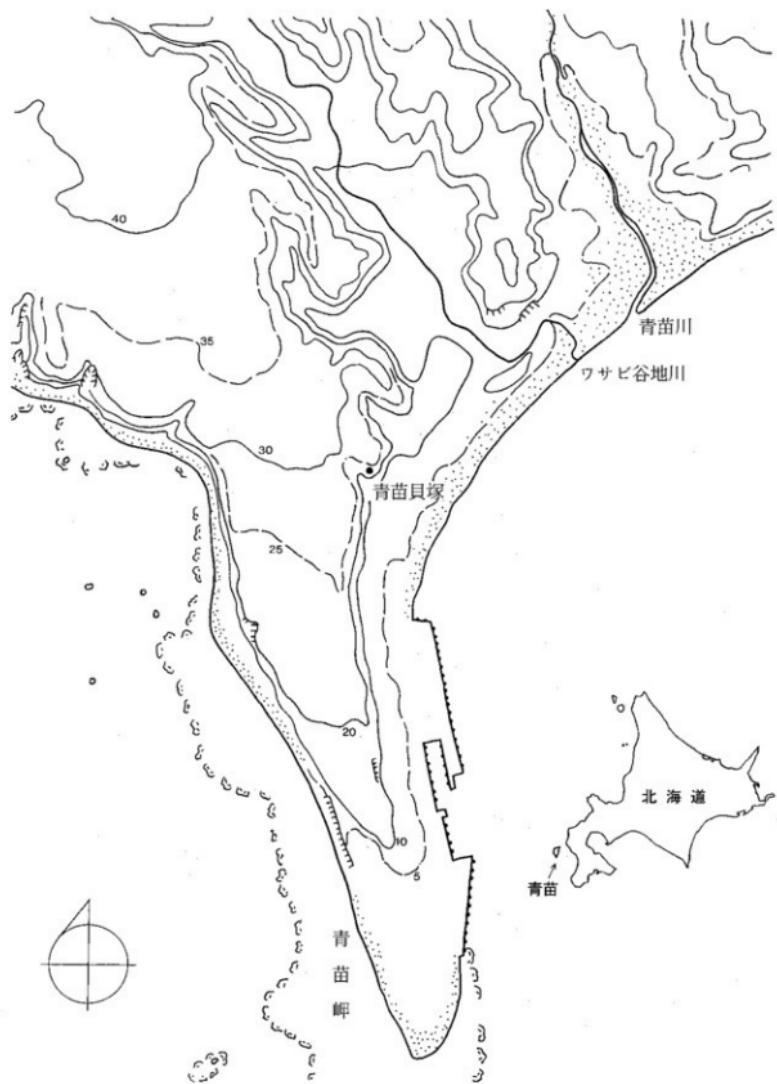


図 I-1 青苗貝塚周辺の地形図

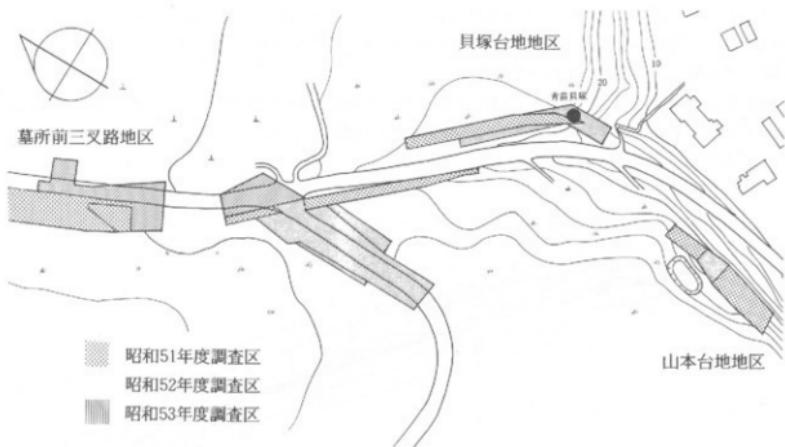


図 I-2 青苗貝塚の発掘区位置図

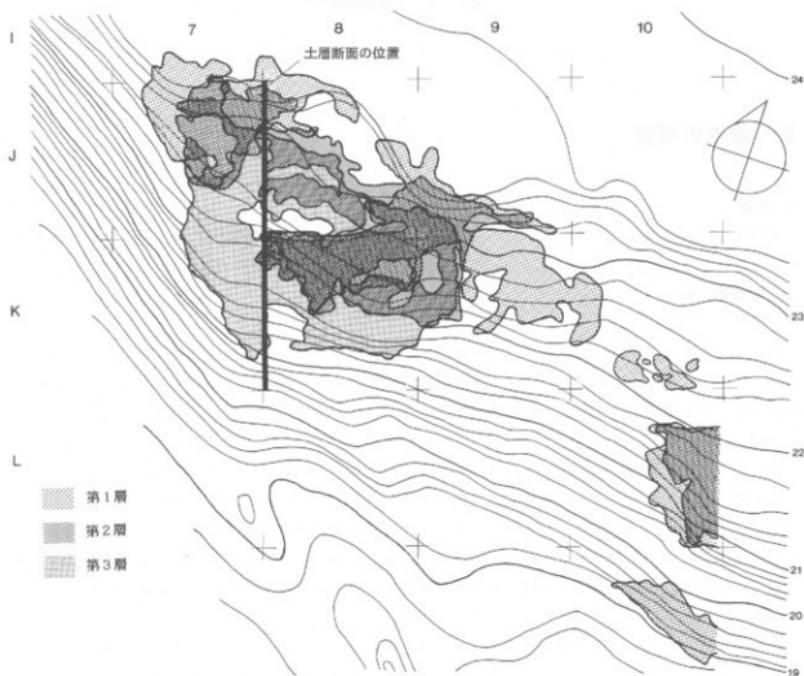
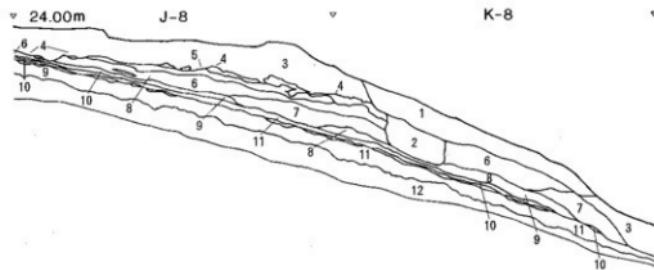


図 I-3 グリッド配置図・貝層分布図

4は1,600年に降灰した駒ヶ岳d火山灰(Ko-d)と考えられる。5は腐食土層である。8は貝層であるが、原図には貝層分布図のように3層にわたる層的な記載はない。10は900年に降灰した白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)である。

層位的にみると当貝塚の機能した時代はB-Tmの降灰した900年以降であり、終焉は1,600年に降灰したKo-d以前、しかも、その下位に腐食土層が堆積していることなどから、そのかなり以前ということが言えよう。



図I-4 土層断面図

3 遺物の概要

1. 土器

本貝塚からは復元土器だけでも43点が出土している。ここでは、深鉢形土器をその器形からa～d種、環形土器a～c種、小型土器a～c種に分け、その特徴と大よその時期について述べたい。

(1) 深鉢形土器

a種

頸部が内傾せず、また、頸部と口縁部との間のくびれも目立たない。全体にすんなりと立ち上がる器形のもの。1～3がこれにあたる。3を除き、器面調整後に口縁部にナデ整形を施す。1は3条の横走沈線がめぐる。1～3ともに器面調整にはハケメ状擦痕が認められる。

b種

頸部が内傾し、胴部の張り出しが器体の高さ3分の2以上の部位にあるもの。4～9がこれにあたる。調整は、6・7がナデ整形後に体部に器面調整を施しているが、そのほかは器面調整後に口縁部にナデ整形を施す。4は3条、6・8は2条、5は1条の横走沈線が認められる。9の横走沈線は場所により2条ないし3条となる。器面の調整は4・5・9が、ハケメ状擦痕、6～8がヘラ削りが施されている。9の器形は、他のb種と若干異なり、胴部の張り出しがより下位に認められる。

c種

頸部がわずかに内傾し、胴部の張り出しが器体の高さ3分の2、もしくはそれ以下の部位にあるもの。10～14の5点がこれにあたる。調整は、14がナデ整形後に体部に器面調整を施すほかは、すべて器面調整を行った後に口縁部のナデ整形を施すものである。10・11の口縁部には2条1組の刻文が鋸

齒状に施されている。11には刻文の上位及び下位に楔形列点文がめぐる。横走沈線は10・13が3条、11・12・14に2条めぐる。器面調整はヘラ削りであるが、10には頸部、13には口縁部にハケメ状擦痕が認められる。先にハケメ状擦痕が施されその後にヘラ削りを施したものである。14のヘラ削りは粗く、器面は“ささくれだった状態”である。

d種

頸部が内傾せず、口縁に向け大きく開く器形である。頸部と口縁部との間のくびれは20を除き、横走沈線が施され、明瞭に分けられる。15～20がこれにあたる。調整は、15・18が器面調整後に口縁部にナデ整形を施したもの、16・17・19・20がナデ整形後に器面調整を施したものである。15～17の口縁部には、2条1組の刻文が鋸齒状に施される。横走沈線は15・17には刻文の上位及び下位に2条ずつ計4条、16には刻文の上位に2条、下位に3条の計5条、18は口縁部に3条、頸部に1条、19は口縁部に2条、頸部に3条、20は口縁部に3条めぐる。胴部の器面調整は15・16が、ハケメ状擦痕が認められるが、16は極めて粗く、ヘラ削りの状態に近い。17～20はヘラ削りによる調整が施されたものであるが、17には胴部下位にへらみがきの後が認められる。18～20は頸部のあたりに、若干のハケメ状擦痕が認められる。18・19は10・13同様、ハケメ状擦痕をヘラ削りの前に行っているが、20はヘラ削り中や後にも施した形跡がある。18～20のヘラ削りは極めて粗く、14同様、器面が“ささくれだった状態”となる。

(2) 壺形土器

a種

頸部に段があり、口縁部の外反するもの。21～27がこれにあたる。21・22は体部にハケメ状擦痕の認められるもの、3～7はヘラ削りの調整が施されたものである。全て口縁部のナデ整形後に、体部の調整を施したものである。口縁部には22・23には3条、24～26には2条の横走沈線がめぐり、頸部には22に1条、25には2条の横走沈線が施される。23・24には口縁部に×を基調とする刻文がめぐり、24にはその上位及び下位に楔形列点文が施される。

b種

口縁部の外反は認められず、頸部に段をもたないもの。28～30がこれにあたる。28は器面にミガキの跡が認められ、29はハケメ調整を施した後、ナデ整形を施している。30は口縁部にナデ整形後、体部にヘラ削りを施す。口縁部の文様は3点とも2条の横走沈線がめぐり、28では口縁部に、楔形列点文により鋸齒状の文様を施している。30は横走沈線の下位に部分的に楔形列点文を施す。

c種

口縁部が内湾し、頸部の段をもたないもの。31～33がこれにあたる。器面調整は3点ともナデ整形が施されている。33にはナデ整形を施した後、部分的にヘラミガキの跡が認められる。口縁部には31・32には2条、33には3条の横走沈線がめぐり、31にはその下位に楔形列点文、32には爪形の列点文が施されている。31はナデ整形後に体部の調整を施し、33は体部調整後にナデ整形を施している。32は全体にミガキが施されており、ナデ整形の痕ははっきりしない。

(3) 小形土器

a種

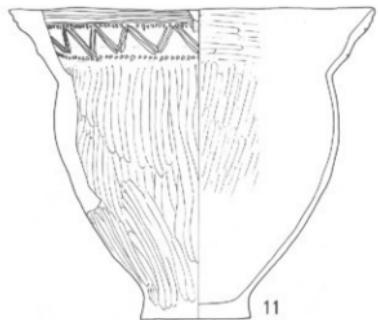
頸部のくびれのもの。36のみである。全体には雑な器面調整を施したのち、口縁部のみナデ整形を施し、頸部に2本の横走沈線をめぐらす。

b種

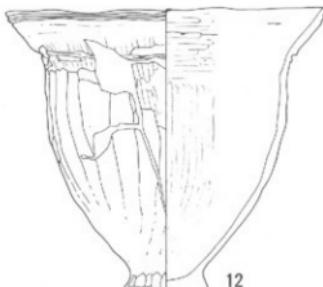
頸部のくびれの認められないもの。34、35、37～39がこれにあたる。35～37ではナデ整形を施したあとに、胴部にヘラ削りを施しているが、38は器面調整後にナデ整形を施している。39はナデ整形のみであり、輪積みの痕が残る。34・38には2条、35・39には1条の横走沈線が口縁部に施される。



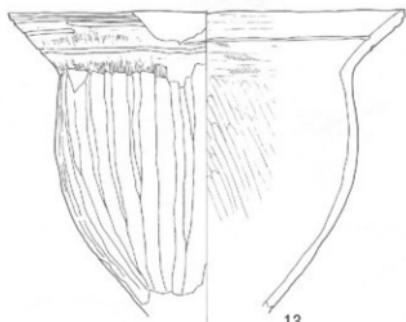
図 I-5 貝塚出土土器 (1)



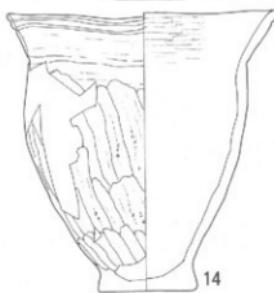
11



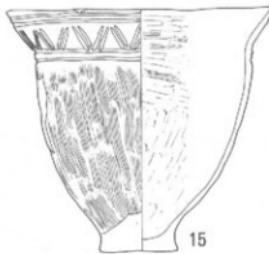
12



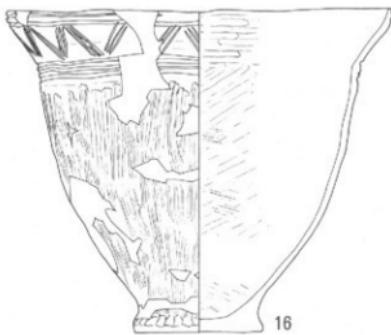
13



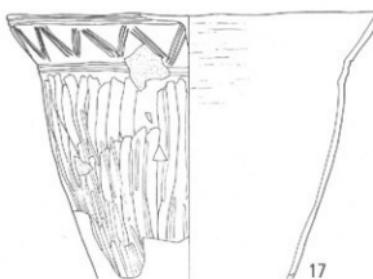
14



15



16



17

図 I - 6 貝塚出土土器 (2)

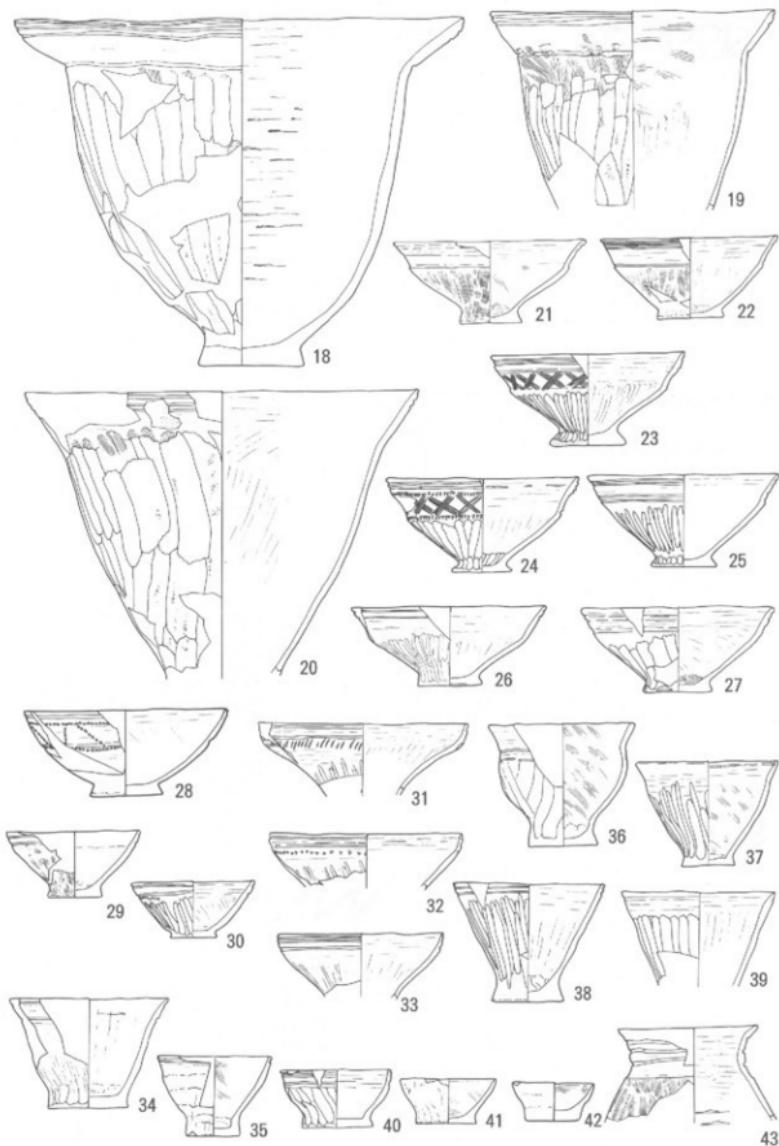


図 I - 7 貝塚出土土器 (3)

表 I - 1 深鉢形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1	a	J - 7		25.5		0.6	1	
2	a	K - 8		30.4		0.5	2	
3	a	K - 8	25.0	24.5	8.0	0.7	3	
4	b	J - 9	25.5	26.1	7.1	0.6	4	
5	b	J - 8	21.3	23.3	8.0	0.7	5	
6	b	J - 7	11.7	13.3	4.2	0.5	6	
7	b	J - 7		14.0		0.7	7	
8	b	J - 7		21.7		0.7	8	
9	b	J - 8	24.0	25.1	8.2	0.6	9	
10	c	J - 7	33.1			0.6	10	
11	c	J - 7	25.1	30.0	9.1	0.5	11	
12	c	J - 7	23.0	26.2	6.9	0.8	12	
13	c	G - 8		32.6		0.7	13	
14	c	J - 8	22.6	22.5	8.1	0.9	14	
15	d	K - 9	19.5	21.9	6.3	0.6	15	
16	d	K - 9	26.2	31.6	10.6	0.7	16	
17	d	J - 7		30.4		0.6	17	
18	d	K - 9	28.3	31.9	8.7	10.0	18	
19	d	K - 9		23.3		0.6	19	
20	d	K - 9		32.3		0.6	20	

表 I - 2 坏形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1	a	J - 8	6.7	15.5	5.0	0.4	21	
2	a	J - 7	6.6	14.7	5.3	0.3	22	
3	a	J - 8	7.5	15.8	6.3	0.4	23	
4	a	K - 9	7.6	15.8	4.9	0.4	24	
5	a	J - 8	7.5	15.6	5.3	0.4	25	
6	a	K - 9	6.5	15.9	5.2	0.4	26	
7	a	K - 9	6.9	15.7	5.7	0.5	27	
8	b	J - 8	7.0	16.8	5.9	0.4	28	
9	b	I - 8	5.3	10.9	4.4	0.4	29	
10	b	L - 10	4.6	10.2	3.8	0.6	30	
11	c	K - 9		15.8		0.5	31	
12	c	K - 9		17.1		0.4	32	
13	c	K - 9		13.5		0.4	33	

表 I - 3 小形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1	a	K - 8	9.5	11.9	5.6	0.4	34	
2	b	K - 8	8.5	11.6	4.2	0.4	35	
3	b	J - 7	9.6	12.3	5.9	0.5	36	
4	b	K - 9		12.6		0.5	37	
5	b	K - 9	8.9	13.0	6.4	0.6	38	
6	b	K - 9	6.5	9.3	4.4	0.4	39	
7	c	J - 8	4.7	9.1	5.7	0.4	40	
8	c	J - 8	3.6	7.8	4.9	0.3	41	
9	c	J - 7	3.1	6.6	4.5	0.3	42	

表 I - 4 壺形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1		K - 8		11.4		0.5	43	

c種

いわゆるミニチュア土器である。口縁部は若干内湾したちあがる。調整は40は器面調整後に、口縁部にナデ整形を施すものであるが、41はナデ整形のみ、42には調整が殆どなされていない。40の口縁部には3条の横走沈線がめぐる。

(4) 壺形土器

1点のみの出土である。体部にハケメ状擦痕が認められ、口縁部から頸部にかけてナデ整形を施す。3条の横走沈線がめぐる。

以上のように器形別に、深鉢形土器4種、壺形土器3種、小形土器3種に分類した。器形と器面調整のあり方、口縁部文様の種類とは、必ずしも一致するわけではないが、全体としてみた場合、a～dの各種と、調整のあり方、文様に相関関係が認められる。その事例をまとめると以下の通りになる。

(1) 深鉢形土器

- ① a種で多く認められた、体部にハケメ状擦痕を持つ例がb種では半々、c・d種で少ない。
- ② a～c種では器面調整後に口縁部にナデ整形を施しているのが多いのに対し、d種ではナデ整形後に体部の器面調整を施すものが多い。
- ③ a種では少ないと口縁部文様の横走沈線がb→c→dと多くなる傾向にある。
- ④ 鋸齒状の刻文の施されたものがa・b種ではなく、c・d種で認められる。
- ⑤ 粗いへラ削りの施され、器面が“さくくれだった状態”的なものがa・b種ではなく、c種に1鉢、d種に3鉢認められる。
- ⑥ d種に1点のみミガキを施しているものがある。

(2) 壺形土器

- ① a種ではすべて口縁部のナデ整形を施してから、体部の調整を行っているのに対し、b・c種では器面調整後にナデ整形を施したものも認められる。
- ② a種に施された口縁部文様は横走沈線のほか、刻文及び、刻文と列点文との組み合わせのものであるが、b・c種は列点文によるものである。
- ③ b・c種には器面にミガキの施されたものがある。特にc種は3点全がミガキによる調整である。

(3) 小形土器

- ① a種の1点は、器面調整後にナデ整形を施しているのに対し、b種ではナデ整形後に体部の器面調整をするものが多い。
- ② b種に1点のみミガキを施しているものがある。

上記の記述をみると、各器種における器形と器面調整・文様との間に相関関係があり、それは、各器形との間における若干のスタイルの差を反映しているものと考えられよう。管見の限りでは、各器種間における類似する特徴は把握しにくいが、器形では、深鉢形c種と小形a種、並びに深鉢形d種と小形b種が（特に34、35、37）、器面調整においてハケメ状擦痕が比較的多く認められるという点では深鉢形a・b種と壺形a種が、ミガキを施す土器があるという点では、深鉢形d種と壺形b・c種、小形b種が共通しているといえよう。

次に、周辺の遺跡についての様相を見てみたい。

乙部町小茂内遺跡の例では、『渡島半島南部の攢文時代の防禦集落』において、“口径に対して器高が低く、胴体部が脹らみをもち体部全体にへラケズリが施されるタイプと、口径に対し、器高が高く体部の膨らみがなく体部全体にカキ目（擦痕）か、ナデが施される2タイプに大別できる”として

おり、当遺跡の深鉢形d類は、“口径に対し高が低く”“体部にヘラケズリが施される”ところで小茂内遺跡出土の前者のタイプと共通し、一方、深鉢形a・b種及び札前例は、後者の特徴に共通する面が認められ、このことは、著者の森も述べているところである。

文様等を各要素でみてみると、本貝塚出土復元個体43点のうち、主にハケメ状擦痕による器面調整が施されているもの12点(28%)、刻線文の施されているもの7点(16%)となるが、小茂内遺跡24点の出土遺物においても、主にハケメ状擦痕による器面調整が施されているものが6点(25%)、刻線文の施されているもの3点(12%)で、若干小茂内例が少ないものの、似た頻度を示す。また、無文(沈線文や刻線文、刻みなどの認められないもの)の土器は本貝塚で5点(12%)認められるが、小茂内では2点(8%)であり、ともに低い頻度であり、器形、文様とともに似た特徴を持つといえよう。一方、細かい部分をみると、横走沈線が多く認められることや、ミガキの施されたものが若干多いこと、深鉢形土器で胴部が張り出す器形が多いこと、小形土器の器形など、本貝塚例における深鉢形c・d種や壺形b・c種、小形b種にみられる特徴が強いようである。

松前町札前遺跡の例では、報告で久保は、出土土器を、遺構の分類に基づき、それとの共伴関係からI～Ⅶに分類し、I、II～V、VI、VII・Ⅷという変遷を想定している。本貝塚の器形を札前例と対応させると、深鉢形a種はI～IIIに、同b種はIV～VIに類似すると言えよう。札前例は復元個体の各要素を一覧表にして示しているが、それによると、ハケメ状擦痕による器面調整が認められるものが総点数283点のうち211点(75%)であり、本貝塚や小茂内例と頻度は大きく異なる。しかし、札前例のI～III及びIV～VIに類似する器形であるとした、深鉢形a・b種に限って言えば、総点数9点のうちハケメ状擦痕の認められる例が6点(67%)となり、札前出土の深鉢形土器185点のうち、ハケメ状擦痕の認められたもの163点(90%)と同様に高い。また、口縁部が無文であるもの(沈線文や刻線文、刻みなどの認められないもの)の割合は、本貝塚の深鉢形a・b種では9個体中2個体(22%)、札前例では、口縁部の確認できる深鉢形土器169点のうち、無文のものは36点(21%)となり、似た頻度である。また、刻線文の施された個体は深鉢形a・b種には認められないが、札前例でも全体の4%と極めて低い頻度を示す。このようにしてみると、深鉢形a・b種と札前の例はよく似ていると言えよう。

札前の報告で久保は、下限時期を10世紀代～12世紀後半期、黒色土層堆積のための若干の年月を考慮して11世紀～12世紀後半期と推測している。一方、『波島半島南部の擦文時代の防御集落』では、青森県側の新しい研究成果をもとに、その出土土器との類似などから、札前については11世紀代に収まりそうであるという。筆者も札前と似た特徴と要素をもつ深鉢形a・b種は11世紀頃の間に収まるものと考える。

一方、深鉢形d種については、どうであろうか。図I-8は器種別における各器形の分布図である。深鉢形土器における分布図ではd種が6点のうち5点がK-9区に出土し(K-9区の深鉢形の全てがd種)、壺形土器ではc種は全てK-9区の出土、小型土器ではb種5点のうち3点がK-9区から出土しているのがわかり、器形ごとの分布図ではK-9区が特異の様相を呈しているのが分かる。図I-3でみるとおり、K-9区における貝層の平面分布はその多くが第I層であり、K-9区に分布する貝層は他のグリットに分布する貝層より新しい層で占めているといえよう。深鉢形d種・壺形c種、小型b種がセット関係にあるとは言えないまでも、それらが、同じ器種における他の器形の土器よりも、時期的に下る可能性が高いといえよう。

	7	8	9	10
J	a bbb ccc d	a b c	b	
K		aa	ddddd	
L				
M				

深鉢形土器

	7	8	9	10
J	a	aaa b		
K			aaa ccc	
L				b
M				

壺形土器

	7	8	9	10
J	b cc	c		
K		a b	bbb	
L				
M				

小形土器

図 I - 8 器種別土器分布図

2. 鉄製品

本貝塚の北西側には鉄生産関連の遺構が検出されており、当貝塚からも、多くの鉄製品が出土している。出土鉄製品の多くは棒状鉄製品（図版 6-1）であり、他に刀子（図版 6-2・3）や鉄製紡垂車図版（6-4・5）や鉄鍋片（図版 6-6～8）が出土している。

当貝塚の北側には同時代の鉄生産関連の遺構が検出されており、ここから検出された鉄滓から、鉄を鋼にする、精錬が行われていたことが推測された。当貝塚には、鉄鍋片も若干認められる。使用不能となった鉄鍋片や棒状鉄製品を素材として、水産資源の処理に必要な鉄器を製作していたものと考えられる。

なお、鉄製品は腐食や一部破損が進行しているため、図示せず、写真を紹介するに留めた。

注) 赤沼英男氏の御教示による。

第Ⅱ章 骨角器

1 鋸頭

今回の発掘で確認した鋸頭は完成品15点、未完成品8点である。

全て開窓式に属するもので、索溝を持ち、頭部や尾部の構造等において共通点が多く、齊一性をもった鋸頭製作がおこなわれていたようである。

以下、まず、完成品についての形態の特徴を述べ、各部位の観察、計測値、素材は表にして示すことにする。未完成品については別に製作工程を中心に考察するつもりである。また、第Ⅳ章にて青苗貝塚の鋸頭の系統について考えてみたい。

なお、ここで使用した鋸頭各部分の名称については図II-1図左上に示す。

(1) 第1類：先端が長く尖るもの（図II-1～3）

肋骨製と鹿角製のもの計5点、全体に細長く尖端から尾部にかけて直線的に巾広くなる。尾端から索溝までの長さに比べて先端部の長さが2倍と長く、先端は断面円形で円錐形に削る。

a 肋骨製（図II-1-1・2）

3例ある。アシカ類の大形の肋骨が使われる。鹿角製の製品に比べ背面の反り返りは大きくなる。また索溝のための抉り込みは浅い。

b 鹿角製（図II-1-3）

3点出土。いずれも角幹部を利用したものと思われ、尾部から先端付近まで海綿体が縦にはいっている。背面が反り返る形が優先したとみえ、鹿角のわずかな湾曲によって海綿体が背面に出ることもある（図II-1-3）。これは、尾部の半分以上が海綿体だけになってしまい弱くなる欠点がある。3点とも索溝をつくる際、先端との境は一段削るだけであるのに対し、尾部との境は巾1.5～2mm程度の隆帯をつくっている。これは鋸の索き綱が外れないためであるのと同時に補強するためもあったのではないかと思われる。

(2) 第2類：扁平で分岐する尾部の両端に刻みをもつもの（図II-1-4～7）

鐵をもつものの1例。鐵装入のスリットをもつものの3例。

a 鐵をもつタイプ（図II-1-4）

小形で扁平である。海獣肋骨を利用していている。反りは緻密質側に索溝がつけられるのでほとんどない。海綿体が製品の背面に出ている。索溝から尾部にかけては、緻密質を削るので薄くなっている。尾部の両側には、1.5mm位の間隔で浅い細かな刻みが9ヶ所につく。

b 鐵鐵を挿入する例（図II-1-5～7）

頭部はスリットと目釘穴をもつ。そのための厚みと共通の構造をもち、鹿角製に限られる。鐵鐵をとめた部分は索き綱を引く時最も力が加わり、スリット部分を破損したり、目釘穴部分がこわれてしまったりする欠損が生ずることになる。

3類と比べて小形で扁平である。索溝から尾部下端の外側に刻みをつける。図II-1-5は、目釘穴が横に2つ並ぶ特殊な例であるが、一つは中心からそれを位置にあって極端に小さい。

(3) 第3類：尾部に装飾の線刻をもつ（図II-1-8・9、図II-2-10～13）

a 巾広いタイプ（図II-1-8・9、図II-2-10）

基本的なかたちは第2類bと変わらないが、索溝は巾広く半円形の断面をもつ。索溝の抉り込みは明瞭である。背面上の隆帯に刻みをつけたもの（図II-2-10）や、尾部に孤線を組み合わせた彫刻があるもの（図II-1-8・9）など装飾性加工を施す。鹿角枝部もしくは緻密質の比較的厚い第1

尖～第2尖間の角幹部を利用したものと推定される。

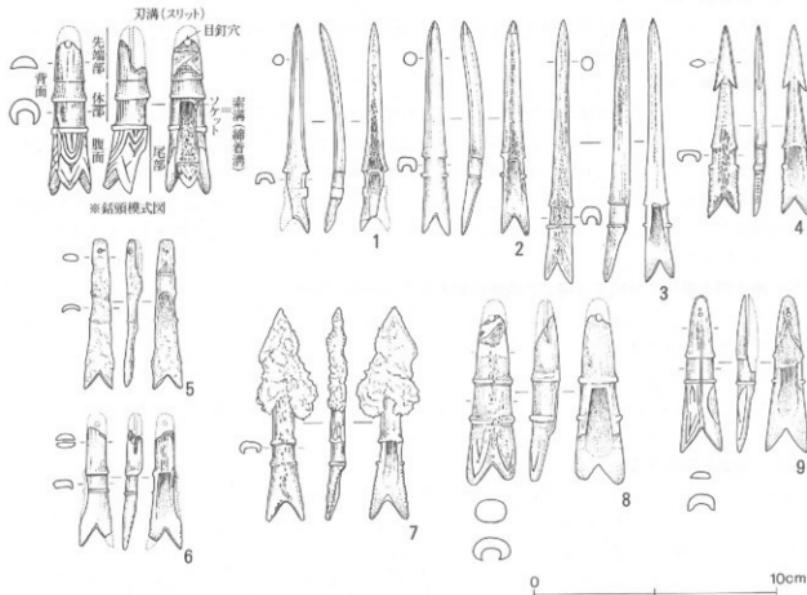
b 断面が円形でソケットの深いタイプ（図II-2-11～13）

鹿角枝部が素材である。索溝部は断面円形で、尾部は扁平に作られ、腹面の索溝部よりやや下方で段がつけられて尾部をつくっている。図II-2-13はスリットの入る方向が他の標品と90度ずれる。鍼を固定しやすくなるために、スリットを索溝面と直交する方向に入れている。

(4) 第4類：尾部が三つに分かれるもの（図II-2-14・15）

青苗貝塚の鈎頭の典型とされる形と尾部に線刻をもつ類である。鹿の第2尖部分を用いたものと思われる。器体表面が円形であるため、尾部は3つに分けられ、文様も3単位が意識されたようである。ソケットは他のどの類よりも深い。

2点の鈎頭のうち、図II-2-14は焼けて黒変し、やや収縮していると思われる。尾部の文様のうち右側の文様は省略されて本来三単位であるべきものが右端では無文となっている。尾部を横断する一本の刻線で、線対称の軸とするか三角文が彫られ、全体で菱形が重なったような文様となっている。これでさらに放射する細線が菱形を囲む。図II-2-15は、U字型もしくはV字型の弧線が重ねられた文様で叉状文も組みあわされている。先端には索溝の段のほか、頭部にも装飾的な浅い段がつく。



図II-1 鈎頭(1)

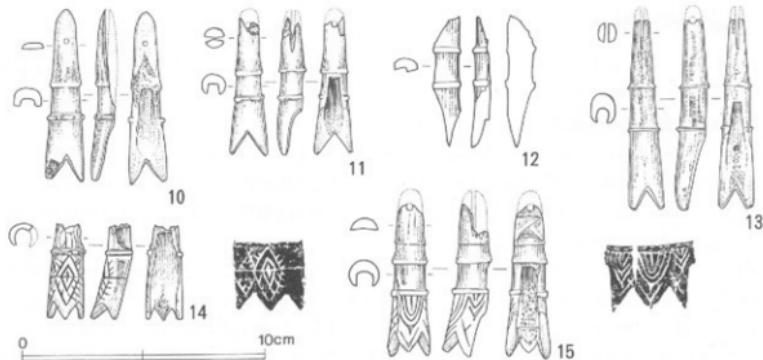


図 II-2 鉤頭 (2)

表 II-1 鉤頭

(1) 第1類 先端が広くとがるもの

a: 骨骨製

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	尾 部	材 料	出土地点	国際編番号	
1	図 II-1-1	83.9	直頭状四角 先端 実心 中央断面 両側に段 溝付ける	60.2 5.3×4.5 5.2×4.3 7.6×4.3	ソケット 中央幅×厚 最大長 隆起	2 14.6×-×3.1 9.5×7.9	無し 海綿肋骨	S K-8	PL33-5
2	図 II-1-2	87.0	完全 表面飾りなし 中央断面 両側に段 溝付ける	64.5 8.8×6.0 3.7×1.2 8.1×0.6	ソケット 中央幅×厚 最大長 隆起	3 34.7×11.2×4.2	無し 海綿肋骨	S J-7	PL33-1

b: 鹿角製

3	図 II-1-3	106.7	完存 実心 5.7×6.4 表面の段 溝をもつて いる	75.5 3.7×2.5 8.4×6.9 7.2	ソケット 中央幅×厚 最大長 隆起	2 34.0×11.0×4.4 8.8×7.8	無し 鹿角	S J-7	PL33-2
---	----------	-------	--------------------------------------------	-----------------------------------	----------------------------	-------------------------------	----------	-------	--------

(2) 第2類 幕平で尾部の内側に刺込みをもつもの

a: 鹿角製

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	尾 部	材 料	出土地点	国際編番号		
1	図 II-1-4	77.6	4H完存 一対	両側のみ 49.8 5.8×1.9 9.5×4.2	ソケット 中央幅×厚 最大長 隆起	2 13.0×8.4	21.2×18.8×3.0 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角肋骨	S J-19	PL33-7

b: 鹿頭を挿入する例

2	図 II-1-5	81.4	頭部半 球形 ×1.5	1 表面を浅 くえぐる	表面を浅 くえぐる 18.9 5.5×1.2 8.8×5.0	6.9 2本の頭部 ×8.7	22.3×13.5×4.5 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-10	PL33-10
3	図 II-1-6	(48.5)	頭部半 球形 ×1.5	1 表面を浅 くえぐる	表面を浅 くえぐる 22.2 6.5×0.9 7.8×3.7	9.3 2 13.5×7.8	28.8×12.2×3.7 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-9	PL33-12
4	図 II-1-7	88.2	頭部 直角 者	1 表面を浅 くえぐる	表面を浅 くえぐる 55.6 5.5×0.9 8.4×5.6	9.0 2 22.6×15.6×4.3	表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-8	PL33-8

(3) 第3類 尾部が2つに分かれ突出部をもつ

a: 木伝いタイプ

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	尾 部	材 料	出土地点	国際編番号		
1	図 II-1-8	(59.1)	頭部半 球形 ×1.2	1 表面を浅 くえぐる	表面を浅 くえぐる 22.3 7.8×5.0 5.5×3.9 12.8	2 13.5×7.8	29.0×21.7×7.8 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-9	PL34-2
2	図 II-1-9	69.3	頭部半 球形 ×1.2	2 表面を浅 くえぐる	25.4 21.7×2.6 11.3×7.3	9.2 2 15.0×8.6	29.8×17.5×4.6 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-9	PL34-1
3	図 II-1-10	63.8	頭部直 角者	1 表面を浅 くえぐる	30.5 5.5×3.0 5.9×3.0 11.3	11.3 2 11.5×9.0	27.0×15.6×5.1 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-7	PL34-3

b: 断面が円形でソケットの深いタイプ

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	尾 部	材 料	出土地点	国際編番号		
4	図 II-2-11	(55.4)	頭部半 球形 ×1.2	1 表面を浅 くえぐる	表面を浅 くえぐる 23 5.7×5.5 16.1×8.9	8.9 2 13.2×9.3 21.6×15.0×5.9	無し 鹿角	S J-7	PL34-11	
5	図 II-2-12	(53.9)	頭部半 球形 ×1.2	-	表面を浅 くえぐる	- - 12.0 2 22.5×-×-	無し 鹿角	S J-7	PL34-15	
6	図 II-2-13	77.0	頭部直 角者	1 頭部直 角者	頭部直 角者 4.8×4.8 10.8×10.8	15.3 2 10.7×9.5	34.0×14.5×6.9 表面に刺 込みをもつ る	無し 鹿角	S J-10	PL33-9

(4) 第4類 尾部が3つに分かれるもの

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	中 央 部	尾 部	材 料	出土地点	国際編番号
1	図 II-2-14	(40.4)	頭部半 球形 ×1.2	-	- 8.2×6.0 12×9.6	- - 12.0 2 29.0×14.4×10.4	無し 鹿角	S K-7	PL34-7
2	図 II-2-15	(51.5)	頭部直 角者	-	表面を浅 くえぐる	- 6.4×7.0 11.7×11.5 11.0 2 25.0×17.5×11.7	無し 鹿角	S J-10	PL34-8

2 錘頭未成品

錘頭未成品と思われるものが8点ある。そのうち完成品と結びつけられるもの4点、完成品と直接結びつけられないもの4点である。

(1) 海獸肋骨製の錘頭未成品(図II-3-1・2)

図II-3-1は、肋骨の緻密質に近い部分を切断し、適當な長さと巾をもつ細長い板状に整え、索溝の位置を決め、両側から1.5~2mmの切り込みを入れて、尖端部をさらに細く尖らした段階のものである。これから次に索溝を作る突起をつくり出すように側面を整形し、尾部のV字上の切り込みをつけ、腹面に浅い索溝をえぐれば完成する。

図II-3-2は、先端は火を受けて変質し折れてしまったようである。前者と同様、細長い板状の材料を作ったのち、側面や裏面を先端にかけて次第に細くなるよう削り、錘頭の原型を形づくる。全体からみて適當と思われるところに、横位に切痕をつけ体部の位置を決める。そして索溝を作る。さらにこの例の場合は尾部が、四方から末端に向けてV字状に鋭く尖らせるように削っているのが特徴である。あるいは、完成品には見られないが、尾部が2つに分かれないと尖る形の錘頭となるのかもしれない。

(2) 鹿角製の錘頭未成品(図II-3-3~6)

図II-3-3は、尾部のわずかな破損部分以外は全体を残す。長さ、63.0mm、幅9.4mm、厚さ11.0mm(幅、厚さは頭部最大値)。先端のスリット作成と尾部の切り込みを残した未完成品。索溝壁の一部を欠損、尾部の切り込みはなく、平らに切断されたままである。おそらくこの加工が最終の工程だったのであろう。索溝の破損がこの商品を廃棄する要因になったものと考えられる。

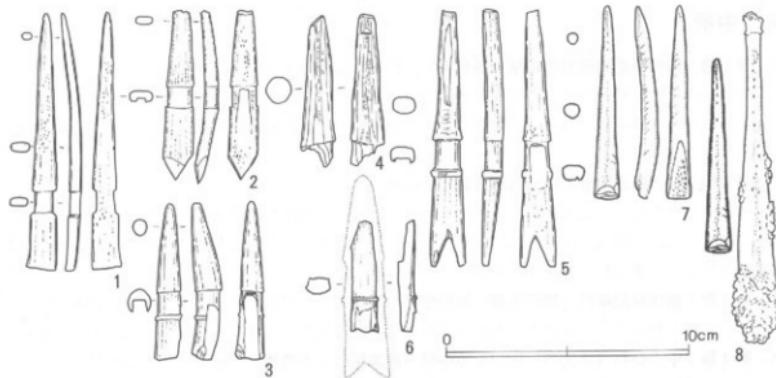
図II-3-4は、先端と索溝の一部を残すもので、長さ、62.3mm、幅14.2mm、厚さ12.8mmである。先端部とされた部分は縦方向の削りが全面について整形される。この削りは金属刃を鹿角加工面に縦に引っ張るように削るので横方向の細かい刃跡が付く。さらに索溝部を作るために鹿角表面は削られて平坦面がつくられ、さらに索溝部分の浅い抉りも作られた段階であった。先端部分のスリットの作成、尾部の切り込みなどが残された作業ではなかったかと思われる。

図II-3-5は、完存する未完成品で、全長105.2mmである。先端部に鹿角の自然面である窪みが残り、尖らずに裁断されたかたちである。その他の索溝、尾部の加工は終わった段階とみてよいと思われる。最終的に先端を研摩する作業が残されているのであろう。

図II-3-6は、索溝部の周囲を残すのみの破片で、現長47.2mm、幅12.0mm、厚さ8.1mmである。表面には鹿角の自然面が残り、未加工であることがわかる。しかし索溝部下緑の隆帯部が見られる。海綿体側には索溝の切り込みと索溝の抉りがみられるが、加工途中であることが残された痕跡から判断される。加工途中においてかなり破損したもので、製作の方針を変更していたことも考えられる。いずれにしても、この種の錘頭の製作にあたり、索溝部の位置を隆帯で決めること、スリットを入れることなどが、早い時期に行われたことがわかる。

(3) アシカ陰茎骨利用の錘頭未完成品(図II-3-7)

図II-3-7は、完存する未完成品で、長さ78.7mm、幅10.7mm、厚さ6.6mm(尾部)。肋骨には見られない丸みと、錘頭の背面基部の表面に、陰茎骨に特有の形態(わずかな窪みと小孔群)をみる。陰茎骨の先端と基部を切断して細く削ったものである。厚さはもとの陰茎骨の半分位までに削っている。海綿体が露出しない範囲で削り、全体を細くしたのである。尾部を作るために斜めに切断したところで加工は終わっている。現存の製品に見る限り陰茎骨を素材とした錘頭はないが、この資料のあることからみれば、完製品もあったことが予想されるのである。



図II-3 鋸頭未成品(8:7を陰茎骨と並べて示した図。右がアシカ陰茎骨上面)

表II-2 鋸頭未成品

① 海綿防骨製の結晶未成品								
番号	標因番号	全長	先端部	器体部	尾部	材質	出土地点	回数番号
1	図II-3-1	106.6	鋭く尖る 巾×厚: 9.4×4.5	両面から1~2mmの切り込みがある。 尖溝なし。	V字状の切り込みなし。 巾×厚: 11.3×4.8	肋骨	SL-8	PL23-3
2	図II-3-2	69.1	火をかけて変形、欠損。 巾×厚: 10.5×5.4	両側からの切り込みがある。 巾×厚: 9.3×5.1	V字状の切り込みなく、鋭く尖る。 巾×厚: 11.2×4.4	肋骨	SK-7	PL23-5

② 鹿角製の結晶未成品

番号	標因番号	全長	先端部	器体部	尾部	材質	出土地點	回数番号
3	図II-3-3	65.0	全深成で残る。 巾×厚: 10.0×5.1	鹿角骨の一部、被削する。 巾×厚: 10.2×5.3	V字状の切り込みなし。 巾×厚: 11.5	鹿角	SL-10	PL24-11
4	図II-3-4	62.3	表面成で残す。	鹿角の加工あり。		鹿角	SK-10	PL24-12
5	図II-3-5	103.0	自然面のまま残る。 巾×厚: 11.5×7.3	鹿角の加工あり。 巾×厚: 10.1×6.6	V字状の切り込みあり。 巾×厚: 11.6×4.6	鹿角	SK-10	PL23-4
6	図II-3-6	(47.2)	表面の切り込みが加工途中。 隆脊をつくら。		研削する。	鹿角	SM-10	PL24-14

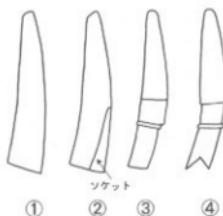
③ アシカ陰茎骨製の結晶未成品

番号	標因番号	全長	先端部	器体部	尾部	材質	出土地點	回数番号
1	図II-3-7	78.7	先端は丸みを残す。 巾×厚: 7.4×6.8		斜めに切断するのみ。	陰茎骨	SL-1	PL23-6

3 鹿角製鋸頭の製作工程

いくつかの未成品資料から製作の工程を考えられるが、つねに同じ工程がおこなわれていたわけではなかったようである。器種による違い、個人差もあったかも知れない。以下判明した工程を①~④の順に列記するが、細部では前後することがあったようである。

- ① 枝部分の先を、鋸頭の全長に合わせて切断する。
- ② 索溝部分から尾部末端に至る部分を割って海綿体を削ってソケットがつくられる。
- ③ 索溝部の浅い溝と隆帯部がつくられる。
- ④ スリットと尾部の切り込み、彫刻が行われる。スリットは②の段階でつくられることもある。



図II-4 鹿角製鋸頭の製作工程図

4 中柄

(1) 第1類：器体断面橢円形の中柄（鯨骨製）（図II-5-3・6）

全体はていねいに整形され、橢円形の断面で器体全体がつくられている。先端にいって薄くなるが、5～6 mm前後の厚みが、中柄の先端部分として使われたと思われる。柄部は断面円形で、切り込みの刃跡がのこる。

(2) 第2類：器体断面円形の中柄（鯨骨製）（図II-5-7）

全体がやや短くなる。先端はやや丸みをもつようになり、胸部が円形を呈するだけふくらみの強い形態になる。なお、胸部が長方形になるようなつくりもある。このかたちで先端が著しく尖るのがあり、刺突具として使われた可能性がある。

(3) 第3類：器体断面扁円（橢円半裁）形の中柄（鯨骨製）（図II-5-1・4・5・13・14）

器体が平面と曲面でつくられる。先端が尖らないが、鋭角に尖らせるかたちをみることができる。

(4) 第4類：中くびれ（矛先形）をつくる中柄（鹿角製とシカ骨製）（図II-5-15～19）

多くに鯨骨製品が器体、先端が刺突具様に単純に細まるかたちであったのに対して、先端が矛先形をつくり、器体部にも変化をつけた形態のものがつくられている。基本的には、鹿角製でつくられ、それを中足骨で模してつくったのであろう。

a 鯨骨製（図II-5-15）

確認できたのはこの1点で、先端を破損するが、やや幅広く、扁平、一端にくびれて器体部をつくり、基部で幅広く厚みを増す。短い柄部をつける。

b 鹿角製（図II-5-16）

1点があつたのみである。現長133、73、先端部幅10、20である。鹿角の緻密質部分でつくられ、一部に鹿角表面の自然面をみると、先端は矛先形で、紡錘形、中間部で少しきびれるが、器体部から基部に厚みを増し、頑丈なつくりとなる。表面には縦方向に削った刃跡が並び、それに直行する細かい刻み痕が付く。

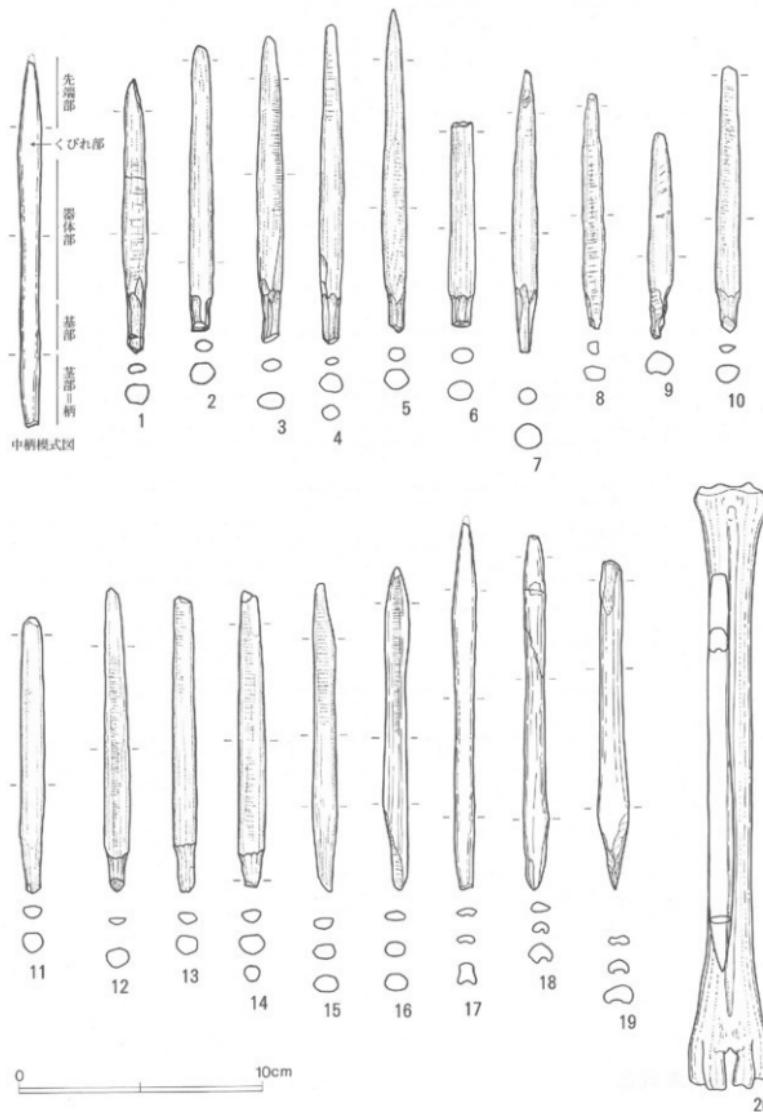
c シカの中足骨製（図II-5-17～19）

中足骨の前面部が使われる。この骨の前面中央の縦溝は深く、縦割りに適したかたちであったことから、この部分を利用するようになった。中柄は先端部の平たく紡錘形に中膨れのする部分と中間部のくびれ部、基部の厚みを付けて短い柄部となる。3例のいずれにも中手もしくは中足骨の外面の一部と髓腔面が残される。

図II-5-17は、この製品の特徴を最もよく示す製品である。先端の紡錘形はていねいにつくられ、薄すぎるのでないかと思うほど削り込んでいる。裏面は平らで、中央に幅浅い溝が直行する。この溝は、中足骨前面の髓腔面で幅狭い。中間部はやや細くくびれ、わずかに幅を増す。基部は厚さを極端に増し、その端は短い柄となる。基部と柄は中足骨の近位骨端の直下である。

図II-5-18は、図II-5-17とほぼ変わらない。中足骨からの製品のとりかた、製作の方法も同じであるが、基部に緊縛のための浅い窪みの見られる点が異なる。

図II-5-19は、先端部を欠くが、図II-5-17・18とかたちが違う。素材を中足骨としたことは同じで、基本的には同じであるが、先端の膨らみの少ないこと、したがって中間部のくびれはわずかで、基部は厚みよりも横幅が広く、柄部が尖る。この鋭い尖りのために、こちらを先端部と考えたことがあったが、逆である。この柄の部分には金属刃で削った刃跡を残す。裏側に図II-5-17、18と同じ溝をみると、やや幅広い。これは素材のとりかたが、中足骨の前面よりも側面にかかっているためと思われる。



図II-5 中柄 1-15:鯨骨製、16:鹿角製、17~19:シカ中足骨製 20:シカ中足骨から中柄を取る図

表II-3 中柄

番号	辨認番号	全長	先端部	器体部	基部	茎部	材質	出土地点	因探査番号
1	図B-5-1	115.0	先端を僅かにくく。 先端厚5.0	全体に扁平形が強い。 中央部の巾×厚：8.4×6.0	最大幅はやや中央より。 巾×厚：8.4×6.0	やや粗削りの作り。	縫骨	S K-10	PL26-4
2	図B-5-2	117.2	先端をくく。 先端厚5.6	断面はきれいな円形 中央部の巾×厚：9.3×8.3	最大巾は基部末端部前。 最大幅の巾×厚：10.8× 9.6	延びがきれいな作り	縫骨	S K-10	PL26-27
3	図B-5-3	126.8	先端を僅かにくく。 巾×厚：4.7×0.6	全体に扁平形が強く粗削。 中央部の巾×厚：0.7×7.5	最大幅は後位。 巾×厚：12.0×8.2	やや粗い削りのまま。	縫骨	S K-8	PL25-23
4	図B-5-4	128.0	先端は完全である。 巾×厚：4.7×2.5	きれいな椎円形を作る。 中央部の巾×厚：9.8×8.2	次第に平らになる。最大幅 はかなり前位。 巾×厚：10.4×8.6	やや粗い削り	縫骨	S K-8	PL25-19
5	図B-5-5	132.6	先端は軽く尖る。 厚さ2.7	やや粗い削りで完全な椎円形ではない。 巾×厚：9.5×7.0	最大幅は前位。やや粗い削り。 巾×厚：10.5×6.5	粗く作る。	縫骨	S J-7	PL25-16
6	図B-5-6	(85.3)	全く失う。	全体整形は最も整うものである。	最大幅は前位。 巾×厚：11.0×9.4	粗く作る。	縫骨	S K-9	PL25-14
7	図B-5-7	107.1	先端は尖っていたものらしい。	円錐の加工が完全なもの。 巾×厚：10.5×10.5	最大幅は後位。 巾×厚：11.5×11.5	やや粗い削り 加工入念。	縫骨	CW-2 (山本台地)	PL74-2
8	図B-5-8	99.1	先端を僅かに尖削している。 巾×厚：5.0×4.6	四面削断面。多少研磨痕。 中央部の巾×厚：8.5×7.4	最大幅の巾×厚：9.8× 7.0	椎体にくびれる。	縫骨	S K-8	PL25-9
9	図B-5-9	84.1	先端を僅かに尖削。 巾×厚：5.2×5.6	先端に向ひ、次第に細まる	最大幅は後端。 巾×厚：10.5×9.2	椎体ははっきりくびれる。	縫骨	S J-7	PL25-13
10		112.1	先端が鋭くとがり、断面は 横かに5.0厚。	断面はやや角ばる。 巾×厚：8.0×6.8	最大幅はやや前。 巾×厚：9.4×9.4	くびれは強くな い。	縫骨	S K-8	PL25-6
11	図B-5-10	115.6	先端の扁平化が強い。 先端厚1.9	次第に扁平化する。 中央部の巾×厚：10.0×8.0	巾×厚：8.5×9.8	はっきりと茎を作 る。	縫骨	S J-7	PL25-2
12	図B-5-11	127.2	やや弱い先端部。 先端厚5.6	巾、厚さとともに余り変化が ない。	多少の巾厚みがあります。 巾×厚：9.8×9.0	研摩され次第に細まる。	縫骨	S J-8	PL25-1
13	図B-5-12	122.6	薄い先端。A型に切れている。 巾×厚：8.7×2	次第に扁平化する。 中央部の巾×厚：10.0×9.0	ほとんどの円形となる。 巾×厚：10.5×11.0	明顯にくびれた部分あり。	縫骨	S K-8	PL25-20
14	図B-5-13	111.8	先端部を欠損する。	次第に扁平化する。	多少扁平化が残る。 巾×厚：10.3×9.3	丁寧な茎をつく る。	縫骨	S J-8	PL25-24
15	図B-5-14	130.0	先端が折れている。	最大巾は中央よりもやや後 方。巾×厚：10.0×8.0	扁平化がこのこと。 巾×厚：11.4×9.0	丁寧に茎をつく る。	縫骨	S K-8	PL25-25
16	図B-5-15	131.8	僅かに巾がひろがる。 巾×厚：-×4.8	横かにくびれる。 巾×厚：8.6×8.4	巾広く厚みます。 巾×厚：10.7×7.6	丁寧な加工で次第に細まる	縫骨	S K-8	PL25-18
17	図B-5-16	133.7	僅かに巾広く厚い。 巾×厚：10.2×5.8	僅かにくびれる。 巾×厚：8.7×6.3	著しく厚みがます。 巾×厚：-×9.8	特につくられて いない。	縫骨	S K-8	PL26-4
18	図B-5-17	152.6	幅広い断面。 巾×厚：10.0×3.5	はっきりと細まる。 巾×厚：8.0×4.0	巾や広く厚みが奢 しい。巾×厚：9.0×9.0	次第に細まる。	シカ 半足骨	S K-7	PL36-2
19	図B-5-18	146.1	僅かに巾広く、薄い。 巾×厚：8.0×3.8	僅かにくびれる。 巾×厚：7.5×5.0	巾が広まり厚みも加わ る。巾×厚：10.5×7.0	急に細まる。	シカ 半足骨	S J-9	PL36-3
20	図B-5-19	135.2	折れていて不明。	僅かにくびれる。 巾×厚：8.8×6.0	巾が著しく広まる。 巾×厚：12.4×7.8	範く尖らす。	シカ 半足骨	S K-8	PL36-1

5 中柄未成品

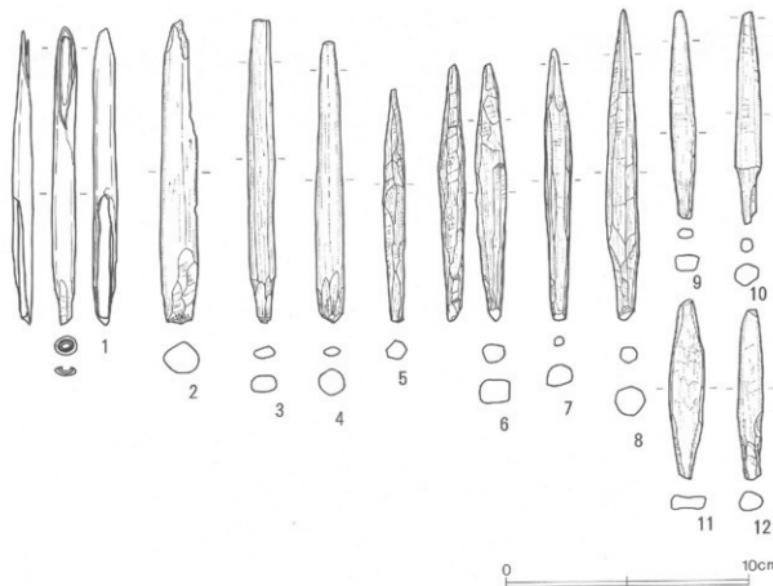
数多くの未成品が認められる。ここでは特徴的なものの解説し、他は一覧表と実測図の掲載のみとする。

(1) 二重かさね鳥骨製の中柄未成品

図II-6-1の1点のみ出土している。現長121.21、尺骨幅9.47、橈骨幅5.02である。アホウドリの左尺骨の骨体部分が使われている。近位骨端から骨体のはば3分の1の位置にある栄養孔が、製品の中央やや上部にあるので、近位骨端寄りの2分の1を使っていると推定される。製作はまず尺骨を現長に切断、鶴腔内に橈骨を差し込み、同じ長さに切断、その後、尺骨の遠位部を斜めに切断して平たく尖銳にし、反対側を柄とするために削りを入れている。全長は他の鶴骨製品とほぼ同じ長さである。現在の先端削り面と反面は大きく破損している。この製品の廃棄されたのは、この部分の破損があったためであろう。現在、挿入されている橈骨を引き抜くことができない位に埋めこまれている。この珍しい例は、桜井報文(1958)、神恵内觀音2号で出土例がある。

(2) アシカ肺骨の中柄未成品

図II-6-2の1例が残されているのみである。左肺骨の骨体～遠位部を使う。遠位骨端は切断し、柄をつくるような切り込み切痕を見るが、切り込みは浅く、柄になるほどではない。骨体部分は裂き割ったままの状態である。中柄を製作する意図がうかがえるが、中途に終わっているのではないかと思われる。肺骨はそれ自体細みの骨体で、加工することによって中柄、刺突具などをつくることも可能であり、擦文時代の人もそう考えたのではないか。しかし、完成させなかったのは、素材として不切なこと、例えば鶴腔がひろく、骨質自体は薄いことが問題になったのかも知れない。なお、製品中に肺骨を使ったものを確認していないので、製作されることは少なかったのではないかと思われる。



図II-6 中柄未成品 (1)

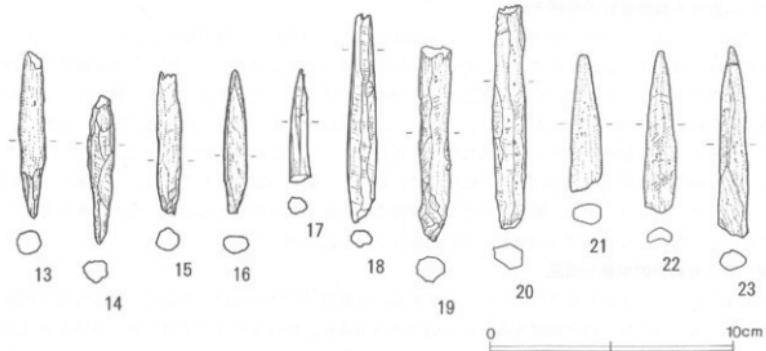


図 II-7 中柄未成品(2)

表 II-4 中柄未成品(1)

(1) 二重かきぬき骨盤の未完成

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地點	図版編番号
1	図 II-6-1	121.2	直角端を削りて切削。 巾×厚：9.5×6.3	未加工のまま。	使用時にいたる龜裂に より半面が剥がる。		尺骨と 橈骨		

(2) アレク骨盤製の中柄の未完成

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地點	図版編番号
1	図 II-6-2	123.0	切断面を残す。	巾×厚：13.9×12.2			切り込みを入れ 加工。	脛骨	S M-10 PL36-6

(1) 先端部断面がV字状を呈する中柄の未完成

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地點	図版編番号
1	図 II-6-3	136.3	特別の加工ではなく。 巾×厚：7.0×4.0	切り取られた面が残る。 中央窪の巾×厚：11.0×7.0			くびれが作られ 加工済み。	脛骨	S J-8 PL35-22
2	図 II-6-4	117.7	扁平に生きる加工はなされ ている。 巾×厚：5.5×2.5	次第に細まる。 中央窪の巾×厚：9.6×10.2	茎部のくびれが、確かに みられる程度。		かすかにみられ る。	脛骨	S J-8 PL35-36

(2) 長い形の中柄の未完成

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地點	図版編番号
1	図 II-6-5	95.9	粗い削りで、先は細まる。 巾×厚：3.0×3.3	粗い削りのまままで中央窪のみ 巾×厚：3.0×3.3	次第に細まる。		茎の加工はまだ 見られない。	脛骨	S J-7 PL35-10
2	図 II-6-6	106.3	粗い削りで先は細まる。	中央に窪化で、厚さがくる。 巾×厚：12.7×10.3	次第に細まる。			脛骨	S K-9 PL35-8
3	図 II-6-7	112.0	光沢特に細めている。	最大幅・厚さ双方にくる。 巾×厚：11.2×8.5	次第に細まる。		特別の加工はな く。	脛骨	S K-7 PL35-5
4	図 II-6-8	128.3	薄く細くしている。	全体の形を想える削りあり。	最大幅が後方にくる。 巾×厚：13.0×12.0		細くするため粗 削りがある。	脛骨	S K-7 PL35-21

(3) 短い形の中柄の未完成

番号	種別番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地點	図版編番号
1	図 II-6-9	86.9	一面を平らにする加工はあるが、 明瞭な研磨痕はない。 巾×厚：2.7	明瞭な研磨痕はない。	形をつくるが明瞭な研磨 痕はなく骨を剥いたま の状態かもしれない。		やや細めた加工 がある。	脛骨	S J-10 PL37-1
2	図 II-6-10	81.9	研磨痕がみられない。 最も窪化は巾×厚：5.5×5.0	断面不整四辺形のような形。 完全形としては表面が粗い。	器体部と同じような形。 巾×厚：13.8×10.0		骨の欠損部あり。	脛骨	S K-9 PL37-2
3	図 II-6-11	79.0	少し欠けたはいるが、巾広 く厚さもある。 巾×厚：7.4×7.4	細かい削平を作りではあるが、 両面は新鮮な削れた骨ではない。 中央窪は巾×厚：14.8×7.8	最大幅が上方にくる。		基部への移行は 次第に細まる。	脛骨	S J-7 PL37-6
4	図 II-6-12	73.8	先端部のみやせこまく、 厚さを加えて。	研磨痕はみるが全体の形は 整っていない。	やや細い加工が目立つ。		基部は骨かに粗 削りがあり。	脛骨	S J-7 PL37-7

表II-5 中柄未成品(2)

(4) 装体、茎などの加工部分はみられないもの

番号	辨認番号	全長	先端部	器体部	基部	茎部	材質	出土地点	因数編番号
1	図E-7-13	67.5	先端欠損。背面裏食のため加工痕不明。	凡その形は出来てくるが未完成。	凡その形は出来ているが未完成。	基部を作るための削り込みがある。	縫骨	S J - 7	PL37-8
2	図E-7-14	61.1	粗い切断面のみ残す。	粗大削り取りのみ残す。 最大径の巾×厚: 13.0×9.0	長い削り取りのみ残す。	縫骨	S K - 8	PL37-10	
3	図E-7-15	58.3	粗い切断線のみ残す。	棒形に削り取られた状態。 中央縦の巾×厚: 9.5×6.5	器体部との区別不明。	僅かに細く削る。	縫骨	S K - 8	PL37-12
4	図E-7-16	60.1	先端より基部にかけ、縦に割けているため、形状は不明。	縱方向に削り取った裏はある。	縦方向に細く削った跡はある。	かなり細く削るが基部であるかは疑問。	縫骨	S J - 7	PL37-11
5			欠端部であるか先端部であるか不明。かなり粗い加工。	難角表面の凹凸が残る。全体に粗い加工。	欠損	欠損	縫骨		

(5) 茎などの特定位部の形が認められないもの

番号	辨認番号	全長	先端部	器体部	基部	茎部	材質	出土地点	因数編番号
1	図E-7-17	46.3	尖るよう加工を施す。	切削痕のまま。器体の厚みは認識できている。 最大径の巾×厚: 16.0×7.5	不明	不明	縫骨	S J - 8	PL37-18
2			先端を意識した加工はない。	削りたままでの状態。	不明	不明	縫骨		
3			両端が同じように尖るため、先端を次め離す。	切断痕がそのまま残る。中央の刃×厚: 8.0×3.0	全体が歯輪質である。	先端部が基部かは不明。			
4	図E-7-18	86.0	先端部不明。	背面は歯輪質の部分を利用。 最大径の巾×厚: 11.2×8.1	不明	不明	縫骨	S K - 7	PL37-3

(6) 棒状あるいは板状に加工された中柄未成品の可能性のある骨製品

番号	辨認番号	全長	先端部	器体部	基部	茎部	材質	出土地点	因数編番号
1			巾が広く扁平。	扁平な板状、前面は不正確な邊。	不明	不明			
2	図E-7-19	91.9	先端部不明(一方には切削痕あり)。	断面は四角形に近く、きれいで面取りがなされる。 最大径の巾×厚: 11.4×10.5	このままの長さであるのかは不明。	不明		S J - 8	PL37-21
3	図E-7-20	80.6	先端部不明(一方に切削痕、他方は研磨される)。	横方向に幅を狭めた箇所となる。 最大径の巾×厚: 11.5×10.4	不明	不明		S K - 9	PL37-4

(7) 中柄の可能性のある不明伴角器

番号	辨認番号	全長	先端部	器体部	基部	茎部	材質	出土地点	因数編番号
1	図E-7-21	56.5	先端部欠損。	欠損。断面は橢円形。 最大径の巾×厚: 8.0×12.7	不明	不明	縫骨	S K - 9	PL37-13
2	図E-7-22	66.2	先端は鋸く尖る。	器体が2方に削れる。 最大径の巾×厚: 12.0	不明	不明	縫骨	S K - 8	PL37-9
3	図E-7-23	79.4	尖る。茎部不明の跡みあり。	加工は均等され、縫丈なつくり。断面橢円形 最大径の巾×厚: 8.0×11.7	不明	不明	縫骨	S K - 8	PL38-2

6 鋸頭と中柄

別に述べている鋸頭の分類に従い、それに適合すると考えられる中柄の形態を述べる。

第1類鋸頭: 逆刺、鉄鎌を装入しない長い先をもち、やや短い器体と尾部をもつ。索溝部の形はごく浅いのとやや巾広の形がある。

〈中柄〉ソケットの巾狭い形には第1類の尖端のを細くした形の中柄がよく合うが、ソケットの巾は多少広い製品もあるので、それに合う先端をもつ中柄もあったと思う。

第2類鋸頭: 逆刺をつけ、扁平なつくり。尾部にはその両側に刻みが装飾的につく。

〈中柄〉体部がうすいので、索溝は從て浅い。中柄の先端ができるだけ薄いものがよい。最適な型は第4類のへら状の断面をもつシカの中手・中足骨製品、あるいは楕円形断面をもつ、先端がごく薄くつくられている製品がよい。ソケットの底面が浅くレンズ状に凹む。この形の中柄先端の曲面は、ソケットの凹面形にぴったりである。

第3類鉈頭：鹿角製で大形で、尾部の表面に菱形の線刻文がつく。鉄巻が必ず挿入される。ソケットの巾は多様である。

〈中柄〉

- a 巾広く浅いソケットには梢円形断面をもつ中柄で、先に入ってやや細まる形もものがよい。
- b 巾広でやや深いソケットには梢円形断面の巾広形が合う。
- c 最も巾広く、且つかなり深いソケットをもつ大形の鉈頭に合う中柄はないが鹿角製の幅広型の、それに合うような製品があったのかもしれない。

第4類鉈頭(1)：尾部が三叉し、体

部の丸みが強い。ソケットがさらに深くなる。

〈中柄〉

これに全く一致するものはない。しかし第4類とした中柄は、ほぼこれに適した製品と思われる。

第4類鉈頭(2)：尾部三叉の例で、ソケットの内径をさらに広くつくる例。

〈中柄〉

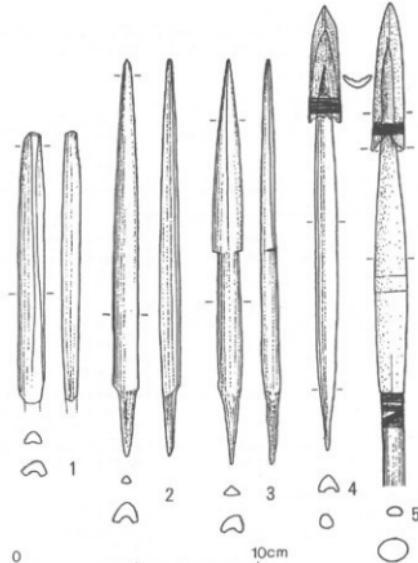
第1類の太い形の中柄（先端欠）は上述のように鉈頭と中柄の先端の形態に一致点がみられ、この鉈頭にふさわしい中柄ではなかったかと思う。

以上にみた鉈頭と中柄の先端の形態はよく一致するもので、実際の使用に当って、使い分けされていたのである。例えば肋骨製の比較的単純なつくりの鉈頭に対しては、中柄もまた簡単なつくりのものが使われ、一方鉈頭も、鉄製巻をつけた製品を使う場合には、それに有効な中柄が使われていたはずである。

アイヌの人々の製品にみる鎌と中柄の装着方法（図II-8）

- 1 中柄 シカ中手もしくは中足骨後面の稜部を使う。先端が鈍いが断面三角、茎部破損し素材骨の自然面が残る製品。室蘭市絵柄遺跡、アイヌ墳墓出土。室蘭市民俗資料館所蔵品。
- 2 中柄 シカ中足骨後面の稜部を使う。茎部を作り出しているのが特徴。室蘭市絵柄遺跡A区pit14号アイヌ墳墓出土9点のうち1点。同所蔵品。
- 3 中柄 上記中柄と同素材。先端部から器体部にかけ中央部に幅広く切り込みが入る。絵柄遺跡出土。
- 4 鎌を装着した中柄 鎌は竹製、中柄はシカの中足骨後面の稜部を使う。鎌を留める糸は膠様のもので固められている。市立函館博物館所蔵品。
- 5 鎌を装着した中柄 鎌は竹製、中柄は鯨骨、T. L 46.3、15.5gr. 標本番号11126（他に中柄部分がシカ中手もしくは中足骨製、木製のものがあり、鎌にも金属製のものがある）。北海道大学植物園博物館所蔵品。

アイヌの人々によってつくられた弓矢の鎌、中柄の考古、民俗資料を調査した資料の一部である。



図II-8 アイヌの人々の製品にみる鎌と中柄の装着方法

これらは沙流郡平取町二風谷遺跡で知られた近世墓出土品と同じ素材、形態をもつ。これらは擦文期資料と比べて素材、形態上で共通した点が伺えると同時に、擦文期にはまた特徴的な形態があったと考えられ、さらに地域差、時期差があったことが推測される。そして青苗貝塚での中柄には海獣骨製が多いことが指摘されるが、それは海獣を対象とした狩猟が中心であったことによるものと思われる。

7 ヤス状刺突具

(1) 鰐骨製

銳く尖る先端をもつ製品を例示できるが、数は少ない。

1点のみである。全長は93.4mm、最大径9.5mmである。

断面略円形、単純な砲弾形で頑丈なつくりである。短い柄部がつく。前面の研摩はやや粗いが、摩耗の痕跡もみられ、使われたことが推測される。

なお、鯨骨製の刺突具的な形態をした製品は他にもあるが、中柄として使用された可能性のあるものを除くと、幾つかの類例があげられるかと思われる。

(2) 鉄製の先端部をもった刺突具

鯨骨製の長い柄の部分の先端に鉄製の鎌を装着したと考えられる。先端の根バサミ部分は多くが破損し、もちろん鉄鎌の残される例はない。柄のかたちで①～④の4タイプに分けられる。

① 膨らみをもつ先端部とやくびれる中間部、再び径を増す基部があって柄となる。ていねいに作り込まれている。先端に目釘穴はないので、差し込むだけであったが、鎌の底部がくびれるので、ある程度固定されたと考えられる。図II-9-1・2が該当する。

② 上記①の未完成で図II-9-3の1点のみである。全体の形がすでに作られている。未製品としては最終段階といえよう。

③ 先端に膨らみをもたないかたちで、①に比べて短い。このタイプのものに、根バサミ部分の残された例があり、それによると、幅は1mmである。図II-9-4～6が該当する。

④ 鉄製のヤスを先にはめるもので、図II-9-10の1点あったのみである。全長61.6mm、径10.1mmである。外形は鯨骨製の短い鐵形製品であるが、先端を深く抉り、鉄製のヤス先を挿入固定したと考えられる。スリット部分は長方形、周囲に鉄が付着する。短い柄がつくれられ、固定されたことが推測される。

表II-6 ヤス状刺突具

a 鰐骨製									
番号	発見場所	全長	先端部	基体部	基部	基部	材料	出土地点	出典番号
1		93.4	研摩はやくせい。細孔あり。			粗い。	鯨骨		
b 鉄製の先端部をもつ刺突具									
番号	発見場所	全長	先端部	基体部	基部	基部	材料	出土地点	出典番号
2	図II-9-1 (22.6)	12.7	中間部より外張。	折れているために詳細は不明。	太くなる。10.0×9.8。	ややきれいに削る。	鯨骨	S K-9	PL35-11
3	図II-9-2	104.3	僅かに凸状が広がる。巾8.4	少しくびれる。巾×厚：8.0×6.0	太くなる。巾×厚：9.8×6.0	粗く削る。	鯨骨	S K-8	PL35-17
4	図II-9-3	143.5	先端はA鉄に付着り、背面に巻き筋ある。中央部の巾×厚：5.0×1.5	断面が円形。中央部の巾×厚：9.0×8.8	太くなる。	削られて粗くなっている。	鯨骨	S J-8	PL35-15
5	図II-9-4	112.4	先端に凹く、扁平になる。先端部3.8	底平。中央部の巾×厚：8.8×7	最もかく、厚さが増す。巾×厚：10.4×9.0	粗い鎌が付く。	鯨骨	S J-7	PL35-5
6	図II-9-5	110.0	太形のつくり。先端部の巾×厚：4.9×5.0	断面が丸みをもつ。中央部の巾×厚：9.3×8.4	最大径は後端にくる。入念に加工される。巾×厚：11.3×10.8	入念に加工される。	鯨骨	S K-9	PL35-6
7	図II-9-6	105.1	巾が広がる。人手が欠損する。	幅広くくびれ。巾×厚：8.8×6.0	幅広く丸みあり。巾×厚：10.2×8.9	やや粗く削りくびれる。	鯨骨	S J-8	PL35-7
8	図II-9-7	120.3	先端部分欠損。巾7.5	くびれが弱い。巾×厚：8.4×7.5	太い。巾×厚：8.0×8.6	粗く削る。	鯨骨	S K-8	PL35-6
9	図II-9-8	105.8	先端部分欠損。巾6.0	くびれが弱い。巾×厚：8.4×7.5	太い。巾×厚：10.2×10.0	粗く削る。	鯨骨	S J-8	PL35-7
10	図II-9-9	92.8	巾が広がる。巾8.8	基部より先端部に刃状突出部がある。	太い。巾×厚：10.5×10.0	ややきれいに削る。	鯨骨	S K-8	PL35-6
11			先端は不規則。巾×厚：9.5×0.2	折れの部分で僅かにすぼむ。	太い。巾×厚：10.5×10.0	均等に削り込む。	鯨骨		
12	図II-9-10	61.6	抉りが深く入る。	巾×厚：10.1×8.1	細くなる		鯨骨	S K-8	PL34-4

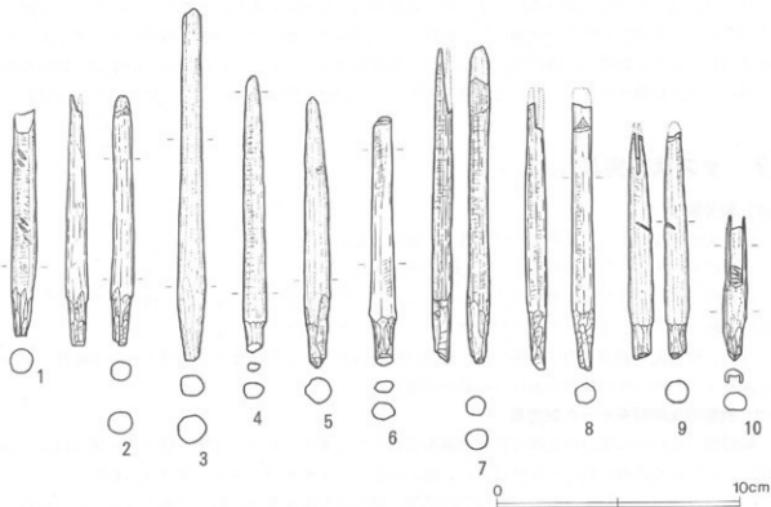


図 II-9 ヤス状刺突具

8 鳥骨製骨針

アホウドリの桡骨製の針 2 点が出土している。先端の長い削ぎ面は金属刃によるものであろう。図 II-10-1 は、全長 107.90。一方の端に骨を輪切りにし、折った痕跡がみられる。全体に均等の幅がみられるので桡骨の骨体の中間部が使われているであろう。先端は骨の遠位部で、当初からこの長さであったかはわからない。切断は骨の幅広の平面を削ぐようにつけられている。図 II-10-2 は、全長 89.00 である。上記例に比べると短い。一方の端に骨を輪切りにした折った痕跡をみると。先端の切断は図 II-10-1 と同じ方法で、削ぐように切った痕跡がよくのこる。

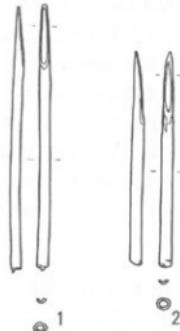


図 II-10 鳥骨製骨針

表 II-7 鳥骨製骨針

番号	種別番号	全長	先端部	基部	基部	材質	出土地點	回収編番号
1	図 II-10-1	107.9	斜めに切断。鋭い先端となる。	巾×厚：5.4×4.6	末端に切断痕をみるのみ。	特別な加工はなし。	鶴骨	CW-2 山本台地 PL74-4
2	図 II-10-2	89.0	斜めに切断。先端欠損。	一部に削り跡をみる。 巾×厚：4.0×3.5	木端に切断痕をみるのみ。	特別な加工はなし。	鶴骨	SJ-1 PL24-13

9 有栓弭型鹿角製品

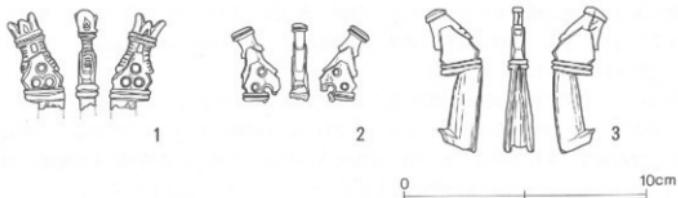
下記の 3 点が出土している。その形態から A (図 II-11-1) と B (図 II-11-2・3) に分類した。

図 II-11-1 は、頂部は、花弁状の彫刻で構成されるが、大小 4 枚からなり、それぞれに小孔が開

けられている。表面はよく研磨され、極めて滑らかな光沢をもつのは、人手に触れる機会が多かったからであろう。この上端の下に二本の隆帯がつき、器体部となる。この部分はソケット部に対して40度の傾きをもつがこれは鹿角の傾きから得られる自然の傾きである。器体部は扁平な台形で、3つの大孔、長方形の孔側方の刻みなど、かなり複雑な彫刻が施されている。3つの孔は極めてきれいに開孔し、相接している。この部分は特に厚く作られ、ここに栓が付けられるとすれば、ある程度固定することができるであろう。孔はほぼ垂直に開けられている。ソケット部分はその根本から折れてない。この折損部分をみると、鹿角の海綿体部分にあたり、そのために弱かったと推測される。

図II-11-2は、頂部は平らで2つの隆帯がめぐる。器体部は上記の例のように強く傾く。この部分の彫刻は上例と同じで、五角形を呈した部分が3枚縦に重なるようにして上に伸びるという独特の形を作る。一番下のものが厚みがあり、2段目、3段目と次第に厚みを減じてゆく、極めて入念なつくりといえよう。孔はもっとも厚い部分に開けられている。ソケット部分は上例同様全く同じ箇所で折れている。折れ目をみると、器体部とソケットの繋ぎ部分が僅かに8.4mmしかなく、海綿体の部分に当っていたため極めて折れやすかったと考えられる。

図II-11-3は、完存しているものであるが、器体部に特徴的な3つの孔がみられず、未製品と考えられる。頂部はもっとも単純で浅い隆帯が刻まれているのみ。この隆帯の下に台形の形、さらに五角形の形が刻まれているのは上例と全く同じである。装飾的な刻みは少ないが、器体の上部の台形部分に縦と横方向の刻みがつく。ソケット部は完存し、良く研摩された平滑な面がみられ、その末端に突出する隆帯がつく。この隆帯はソケット部に軸部を挟んだ場合、固定するために巻いたベルトのずれるのを防いだものだったであろう。



図II-11 有栓彫型鹿角製品

表II-8 有栓彫型鹿角製品

番号	辨認番号	分類	全長	頂・器体部	ソケット部	材質	出土地點	国庫編番号
1	国B-11-1	A	30.9	長さ×巾×厚: 29.8×14.8×6.9	欠損する	鹿角	SK-7	PL24-19
2	国B-11-2	B	37.7	長さ×巾×厚: 35.5×16.0×7.7	欠損する	鹿角	SK-7	PL24-9
3	国B-11-3	B	61.1	長さ×巾×厚: 28.1×15.8×7.2	長さ×巾×厚: 33.8×16.9×12.2	鹿角	SM 10	PL24-16

10 切断あるいは切り込み加工痕のある骨格について

(1) アシカ肋骨の加工と切断

本遺跡の主体獣類はアシカであるが、肋骨の出土が多い。一個体から得られる部位としては中手もしくは中足骨、指趾骨に次いで多いが、検出標本としては肋骨がもっとも多かった。おそらく意図的に肋骨が居住地まで運ばれ、骨器製作の素材とされたからであろう。

a 肋骨の切断

海獣類の骨の中で切断痕が最もよくみられるのは肋骨である。これは肋骨が四肢骨にくらべて数が多いということもあったが、解体時に切断されたり、骨器製作のために切断されることが多かったことによるものと思われる。

① 肋骨のほぼ中央のところでの切断

このことは、P.L.116の1でみるとほぼ完存する肋骨を標本として、図版9-1～5の近位部を残す肋骨の長さはほぼ等しく、一方遠位部（下半部分）に当る図版9-7・8は下端で折れているが、復元すればほぼ同じ位の長さになる。このようにほぼ中央のところを狙って切断しており、この切断法は外側から切り込むのと、ある程度切り込んでおいてから、次に内側に折り込むといった方法をとっている。

② 肋骨近位端部の切断

この部分に切断痕をみると標本はあまり多くはないと思われるが、図版9-2はその好例を示している。それによると切り込みの刃は肋骨小頭（上端関節部の末端）と肋骨結節（小頭の曲がる角）を結ぶ線と並行するように切っている。このことは肋骨を切断する際の一つの方法で、肋骨を胸椎から切り離すとき付いたものと考えられる。

このように肋骨を切り離すときの切断が、内側についているということは、肋骨が切られ、内蔵が取り出されたその上で切り込まれたからであろう。

b 肋骨にみる加工

① ほぼ完存する肋骨にみられた加工（図版9-6）

右肋骨の完存例であるが、近位骨端につく切痕と、前後両側につく切痕をみることができる。近位骨端の傷は、解体の際のものと思われる。両側の傷は削り込むような切痕で、他の肋骨片にも共通してみることができる。切痕は肋骨の骨体の中央部についているのが注目される。

② 切断された肋骨にみられた加工

肋骨の多くの例では骨体部に切断痕をもつ。切断は骨体の中央や下方の位置ではないかと思われる。図版9-7～10にみると、2度3度切りつけて切断しているようである。これは解体痕ではなく、骨器製作の素材を得るために第一段階とみられる。当然近位骨端側にも切断痕が残されており（図版9-1～5）、これの近位骨端には上記に述べたように切断痕がみられる。

図版9-11・12は、両端が切断され、その一方の側に加工痕がみられる。下方の遠位骨端側も粗く切断されるが、両側の加工は上位3分の2である。下方は保持していた部分であったと思われる。切痕には3～4mm幅の刃跡が連続してつき、その範囲は10～13cmに及ぶ。この加工は肋骨の側壁を削る作業で、鈷頭の素材になる板をつくったのである。幅は16mm前後まで削られているので、完成品の幅12mmまでわずかである。この段階で肋骨を背腹面で割り、さらに平板な板とし、腹面にソケットを、背面に溝を刻み、先端部の尖り、基部の角張るかたちがつくられ、鈷頭の形態がつくられたはずである（図II-3-1例参照）。

c 海獣肋骨の縦半裁

肋骨を内外面に分かつように縦に裂いたものである。これは扁平な板ができるわけで、鈷などの製作材料となつものであろう。

図版9-6・12は肋骨の前後両側面を切るもので、骨器材料側面を削るといった加工と、その後に研磨しているものがある。

(2) 鯨類の骨格にみる加工痕

鯨類の骨の多くに加工痕を見ることができた。切断の際に出る削りくずのようなものを入れると多量のものになるが、ここでは主として切断の際につけた切り傷をもつ例を挙げて、加工状況について

ふれておく。

a 肋骨につく例

類例は多くないが、典型的な標本がある。P L.118-3がそれで、上端を輪切りにし、その中程に、金属製の刃を骨に直角に当てて切り込みをした痕がみられる。同じ方法で切断しようとしたのであろう。図版9-13は、こうして切断したもので、それをさらに縦に打ち割っているものである。この長さは156.0である。P L.118-3の切り込みまでの長さがほぼ同じ位であるところをみると、この長さが、必要とされる一定の規格であったようである。

b 長方形に切られた鯨骨片

図版9-14は上に述べた肋骨切断片とほぼ同じ長さのもので、これも意図的に長さが決められているものであろう。上下と両側を金属器で切断し、海綿体側はほぼ平らにされるなど、丹念に骨の面を削り取っている。こうして一定の長さの材が用意されではじめて規格化された製品ができたと思われる。

c その他の小断片

図版9-15・16は鯨骨を削り込んでゆく際、1~2度の削り込みで剥がした骨片である。金属器で木を削り込む際に剥離したものと形態上でほとんど変わらないので、ほぼ同じような刃物の使用によって出来たものであろう。木よりもずっと堅い骨をこのように剥離していることは、鋭利な鉄製の道具の使用がされたことが推測させる。図版9-18はその切り込み状態を示すものである。

d 鯨骨の切断加工

これには加工の状態で三つに分けられる。

① 図版9-17~19。第1次加工ともいべきもので、切断面が裂かれたり一面のみをもっているもの。つまり、大まかな切断加工である骨である。おそらく原材となるべき骨を、鉄製の刃器で幾つかに打ち割る際に出来た破片が多数あったのであろう。

② 細かい刀痕をもつ骨片(図版9-20・21)。

第2次加工は製品として形を見ることの出来ない骨片であるが、骨の一端あるいは一面に切断痕があり、加工調整の第1段階に属するものの破片であろう。つまり原材を切断し、それに次ぐ製作工程に入ろうとする際のものである。

最大のものは、長さ180mm、厚さ30mm、巾35mm位のもの(P L.36-8)で表面はあまり手を加えていない。それでも細かい刃痕がたくさんあるところをみると、自然に手を加えて平らにしているのであろう。

裏の海綿質部でもまれに平らになるまで面取りしている。

③ 第3次加工。ここから意図的な加工がはじまる。骨全体にまだ原材の面が残るが、ある程度製作の意図を伺うことができる。図版9-22がこれにあたる。

(3) 鹿角にみる加工痕

鹿角として出土したものは、すべて何らかの加工痕を持っているものであった。このうち3点(図版9-23~25)は鹿角の枝の分岐部であって、その上下に鋭利な刃物で切り付けられた傷が見られる。つまり、分岐部を挟んで上下を切断したものであって、鹿角の分岐部以外の幹部を利用したものの残片である。このことから棒状を呈した幹部が利用しやすかったことが分かる。この他の角片がほとんど見なかったのは角を極めて効率よく利用したからであろう。

枝(図版9-26)。上下に切断痕があり、表面に削った跡がある。銛頭の長さに一致する。

角幹(図版9-27)：角幹を二つに裂いたもの。上下に切断痕があり、さらにこれを2つに裂いている。この角片は角幹部ではあるが全体に丸みがなくむしろ扁平な感じが強い。このように扁平性の強い部分は、角幹でも分岐部に近く、且つ枝の分岐する側にみられる。この角片は枝の分岐する直下

で切られ、さらに縁に割り、そのうちの外側部分を切り取り、残った側の丸みの強いほうを残して、これを角器製作の材料としたものと思われる。

第Ⅲ章 動物遺体

1 軟体動物門 Phylum Mollusca

(1) 腹足綱 Class Gastropoda

クロアワビ or エゾアワビ

Haliotis discus discus or *Haliotis discus hannah*

アワビは本貝塚における主体貝種であって、しばしば広い範囲でブロックをなしている状況をみたが、特に多かったのはK-10からL-10に至る貝塚の東寄りにおいてであって、東の方から緩やかに傾斜する斜面上に敷きつめたようアワビが広がっていた。このような状況はおそらく貝塚の全面においてみられ、当発掘区の東の方に更に続きがあると推測される。貝層の厚さは確認されたものだけでも貝殻が数枚重なる程度であるから、特に厚いものではなかった。もっとも、これもここが貝層の外れであることから、別の地点では更に厚いアワビ層が埋存することもあり得よう。

採集されているアワビは、大小様々の大きさの殻が含まれ、特に殻を揃えて探ることはなかったようである。小さな殻は横径25.0mm、長さ35.0mm前後であったが数は少なく、50.0mm位からは漸次大きな殻に至るものであり、大きな殻は最大140.0mmを越える（しかしこの程度のものは稀で、110.0mmが普通にみられた大型の殻であった）。

なお、アワビにはこれを採る際に突き刺した鉄製ヤスの四角い孔を見る。一辺4~5ミリの大きさで普通は1孔であるが、2孔であることもあるらしい。孔は殻のほぼ中央から殻頂近くにつくことが多くそのあたりが狙う場所であったのであろう。

ユキノカサガイ *Niveotectura pallida*

かなり多量のものが含まれている。ただし、殻の完存するものよりも水磨を受けているものが多い。

クボガイ *Chlorostoma lishkei*

比較的目立った出土である。最大殻径32.0mmに達するものがあった。一般には27.0mm前後とみてよい。

コシダカガンガラ *Omphalius rusticus*

上記のクボガイに比べて少ないようである。採集標本1個。殻径22.8mm。

オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus*

稀である。採集標本1個は、殻径が8mm前後の細く小さなものであった。

ツメタガイ *Glosaulax didyma*

稀である。採集標本1個。最大殻径40.8mmほどで、後方の月齧孔に近い位置に径4.5mmの大孔があり、食害された跡を残す。

ウラシマガイ *Semicassis bisulcata persimilis*

稀である。殻高48×2/3~25×2/3mm程度のものが数個採集されているに過ぎない。美しい貝であり、殻口などは独特の形をしているので、意識的に集められたと思われるが、特別の加工はみられない。

ヒレガイ *Ceratostoma burnetti*

稀である。2個を採集しているのみ。殻高46.0mm。

レイシガイ *Thais bronni*

多くはない。採集標本は2個。殻高45.4mmと36.6mm。

ヒメエゾボラ *Neptunea arthritica*

とくに目だったような出土ではない。殻高57.0mmと55.0mm。

バイ *Babylonia japonica*

レイシガイ同様に多くない。殻がやや薄いためか破損している標本が多い。またこれらの標本の殻口周縁に摩滅がみられ、破損が採集以前にすでにあったようにも思われ、直接捕食のために採集したのではないのかもしれない。

(2) 二枚貝綱 Class Bivalvia

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*

出土量は多くない。大型の殻で殻長62mm、殻高55.0mm。採集標本中には水磨を受けているものがある。

タマキガイ *Glycymeris vestita*

二枚目中で最も多くの出土をみた種類である。大型の殻で殻長55.0mm、殻高52.0mm位であるが、稀で、多くは殻長40mm、殻高38mm位のものからさらに小さいものが多い。前述のようにタマキガイは出土量が多いが、貝層を形成するということではなく、また小さい殻が多い。しかも、その殻にはしばしば著しい水磨を受けたものが含まれ、全体としてみると食用として利用されたものはごく一部と考えられる。

イガイ *Mytilus corsucus*

多くはない。

アカザラガイ *Chlamys fareri akazara*

殻長63.0mm、殻高67.0mm、アズマニシキガイの東北地方北部の形である。殻表の放射肋が全体に細く鱗状の突起もごく小さいものしかみることができない。

エゾキンチャク *Swiftpecten swifti*

稀である。

イタヤガイ *Pecten albicans*

稀である。左殻2個、右殻片1個、右殻中は水摩痕が見られる。左殻のものも殻頂の耳状をなす前耳、後耳の部分が摩滅しているのは、殻を利用したからであろう。

ホタテガイ *Patinopecten yessoensis*

大型の殻でもあり比較的目についた。破損した殻を含めればかなりの量になるのであろう。殻長58mm×3/21、殻高58mm×3/2である。この貝も耳部を加工した例があり、左殻のもので殻の周囲と両耳側を削っているものがある。このようなものは実際はかなり利用されていたのではなかろうか。なおこの例では貝殻に何か特別の付着があるとか、あるいは変質しているとかいう状況を観察することはできなかった。

陸産貝類

S L-10ベルト第I層の保存のよい魚骨層中に多数のバツラマイマイ (*Discus pauper*) を検出している。殻形は4.5~1.0mm+-までのものを含み、この場所で繁殖していたことを示している。このことは、魚骨層の形成がこの貝の産卵期のピークと考えられる6月~冬眠に入る10月までに行われたことを推定させる。

ウチムラサキガイ *Saxidomus purpuratus*

比較的多かった種類であるが、殻は大きくても殻長76.0、殻高58ぐらいのものであり多くはさらに小さい殻長62mm、殻高48mm程であった。

エゾハマグリ *Liocyma fluctuosum*

ごく稀にみたのみである。

バカガイ *Maactra chinesis*

殻が薄く破損されやすい。

ミルクイ *Tresus keenac* ?

小型のもの 1 個が採集されている。

2 軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

エイ目 Rajiformes

尾棘が 2 点採集されているのみである。特に加工された痕跡は残していない。

3 硬骨魚綱 Class Osteichthyes

サケ科の一種 *Salmonidae* sp.indet.

出土量は極めて少ない。検出魚骨の全てをみているわけではないので問題は残るが、やはり全体量は少ないと推定される。

マダラ *Gadus macrocephalus*

本貝塚での主要な魚種で、カサゴ類に次ぐものである。多少の大小差はあるようで、前上顎骨で全長39mm位と標本が小さく、大きいもので51mmである。歯骨の方が変形が少ないので現生種との比較に都合よいが、現生種体長57cmのもので歯骨全長63.5mmである。貝塚産のは58.0mm位が多いのでやや小さい個体が多いことにならう。すべてマダラであって、スケソウはおそらく含まれてはいないと思われる。

フサカサゴ科の一種 *Scorpaenidae* spp.indet.

最も多くの骨を出したものであって、本貝塚の魚骨のほとんどがカサゴによって占められていたとしても差し支えない状況であった。

大小の個体を含んでいるが、そのうち50%は体長31cm以上のもので、25%がその半分ぐらいの大きさ、残る25%がこれより小さいものとなるようである。

このように大小の個体を出土することは、この地域の沿岸にカサゴの好繁殖場があったからであって、これが主対象となったことも十分考えられることである。これらの大小が混在したような形で捉えられているけれども、それぞれの大きさのものを捕るとときに、条件の差や違いがなかったのかどうか、あるいは実際に生息している状況ではどうかという事柄について、調べてみなくてはならないであろう。

アイナメ *Hexagrammidae* sp.indet.

アイナメ科に近似する標本である。本貝塚での小形の魚の主体種であって、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、主鰓蓋骨、椎体などの出土が多い。

標本は前上顎骨・歯骨によく見られ、体長30cm以上になるのが普通のようである。

アイナメ科の骨の中には現在多棲するホッケは全く見ることができないので、当時の魚類相が現在とはかなり違っていたことを考えなければならないであろう。

カジカ科の一種 *Cattidae* sp.undet.

多くの種類のあるカジカがあるので、今比較標本が十分ない中で種名の特定はかなり困難が伴うのであるが、標本を整理してみると、特に多種類をとっているわけではなさそうである。

① ハリカジカ *Prorocottus okadai*

最も数が多いのは、ナベワリに近似したもので、標本の保存は良くないが、かなり大型のものが多

い。おそらく50cm以上になるものであろう。カジカ類には小さい個体は殆どみられない。

② ギスカジカ *Myoxocephalus stelleri*

確認されたのは、大きな棘をもつ前鰓蓋骨と、その棘だけの破片である。この二つの棘はたまたま筆者が検出したものの中に含まれていたもので、実際にこの程度しか含まれていないものであるかは明らかではない。

カレイ科の一種 *Pleuronectidae* spp.indet.

カレイ類遺体の検出もあり多くの部位骨で認めることができなかった。頭蓋など特徴的であって、これを検出するのは容易なのであるが、どのようなわけからか、これの残る例は極めて稀である。椎体と第一血管間棘が主で稀に歯骨がある。第一血管間棘は比較的大型のものが大部分。椎体では比較的大小がある。

5 鳥綱 Class Aves

アビ類 *Gavia* sp.

出土量は多くない。確認出来た標本では、鳥口骨、尺骨、中手骨、各1点のみである。いずれも不完全な標本であるが、大きさから見て橈骨は最もおおきくハシジロアビに匹敵し、中手骨も大きい。鳥口骨は小さく、シロエリオオハム位の大きさである。

カツツブリ類 *Podiceps* sp.

K-8ベルト第2層より左脛骨が検出している。

アホウドリ類 *Diomedea* sp.

多くの骨が出土するが、頭蓋骨は少ない。その他の四肢骨類の保存も良好とはいえない。上腕骨などは遺存するものはなかったし、僅かに尺骨1例、中足骨、指骨などが出土した。なお、P.L.98の4の鳥口骨の下端に強く叩いた痕がありそれは内側にもある。

ウミウ *Phalacrocorax filamentosus* と、ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus*

ウの類として検出された鳥骨は鳥骨中最も多く、表中に示したもの以外にも多くの部分骨があるはずである。それらには、明らかにウミウと思われる大きさのものと、小形のヒメウに属するものがあった。ただ、標本の中には破損が著しく、この両種を区別することが必ずしも容易でない場合もあり、表中にそれを明らかに示すことはできなかった。

ガンカモ科の一種 *Antatidae* sp.

ガンカモ科の骨の出土はごく少ない。標本中の上腕骨近位端は小さく、コガモと変わらない。鳥口骨、尺骨、橈骨そして中手骨はより大きく、中形ガモ程度のものである。

ワシタカ目の一一種 *Accipitridae* sp.indet.

末節骨1個である。かなり大きなもので、おそらくワシ類のものであろう。多くの骨の中からこの種のものと思われる骨は唯1個を得たのみであった。

チドリ科の一種 *Caradriidae* sp.indet.

大形のチドリ科の上腕骨と思われる。ケリ位の大きさのものかと思われる。カモメ類に近似する形態であるが、近位端の形態が異なる。

カモメ科の一種 *Laridae* sp.indet.

良好な標本がない。この種の鳥の埋存が少ないようである。脛骨と第三指骨があるが、すべておなじ科であるとは決めかねる。もし、カモメ類とすれば、大小のものが含まれており、指骨および脛骨、中足骨の大きいのはセグロカモメ級の骨であろうかと思われ、細い脛骨（P.L.101の12）はカモメ、ウミネコなどと推定される。

ウミカラスの一種 *Uria* sp.

大型の尺骨と上腕骨が出土している。これも極めて数の限られたものである。おそらく同じ個体のものであろう。

6 哺乳綱 Class Mammalia

シカ *Cervus nippon yezoensis*

獸骨中、海獸骨を除くと、陸獸としてシカとイヌがあるだけである。鹿角以外はシカは四肢骨として上腕骨遠位端部と完存する桡骨、尺骨を得ただけである。

鹿角は鈷や他の材料として貴重であり、その断片が出土している。いずれも切断の痕跡をその角片の上下にもつもので、何らかの手が加えられているものであった。そのうち3点は角枝の分岐部分であり、枝や幹部の上下を切り落としたあとのものである。このように見ると、やはりこの部分には角器の材料としては扱い難いものであったのだろう。かなりの量の獸骨の中にあって、シカ骨が僅かに2点のみであったということは、この島に若干シカが生息していたとしても、捕獲することがなかったということが考えられよう。

オットセイ *Callorhinus ursinus*

アシカを除く鯨類でやや目立ったのはオットセイであるが、その数は決して多くはない。しかも、そのすべてが雌の成・若獣であった。標本として採集されたのは、歯は1個で顎骨などは採集されていない。四肢骨では上腕骨と対応する骨、大腿骨という部分があった。その他の部分もあるかもしれないが、小破片になっている場合にはあるいは見落としているかもしれない。上腕骨は、多くが成獣骨であって、若い個体が多数を占めていた。

オットセイの上腕骨は、アシカ類に比べてかなり小さく、この点でも区別が容易であるが、全体の形のよく似ている中で、特に三角筋粗面の形が特徴的であり、アシカに比べて巾が狭く、うすい。また、遠位端の外側の尺側上顎稜が強く発達して一段がつくのを、若い個体でも見分けることができる。

大腿骨は雌の場合、特に細く華奢である。

ニホンアシカ *Zalophus californianus japonicus*

本貝塚で最も多く出土した獸であり、その量は他の獸のどの種類よりもはるかに多いものであった。従って、獸の狩猟はほとんどこのアシカを対象としたものであったということができる。遺体はほとんど全ての骨格を含むが、中でも次のような諸骨が保存良く、また、個体数などを知るうえで重要であった。

① 頭蓋

別に述べているようにほぼ完存する頭蓋がかつて出土しているが、今回の調査では、それがかなり広い範囲であったにも関わらず、そのような頭蓋を検出することができず、すべて破損となつたもののみであった。

そのうちの幾つかを図版編のP L.104に示したが、部分的には各部位が残っていたが、目についたのは、中央稜部分があり、雄のよく成長したものであった。その部分は高さ40.0mmに達しており、それが2~3位に打ち剥がれていたものであって、また、頭蓋の前頭骨、頭頂骨などがすべて欠けているところをみると、かなり徹底的に頭蓋を割っており、このために側頭部なども左右に分離してしまう状況であったようである。その状況はP L.104の4~7などによく見えるところであって、側頭骨などの頭蓋部分は殆ど骨も残しない状況であった。上顎骨も破損したらしく、顎骨が完存するような例はなかった。

② 下顎骨

保存のよい例があるが、ここで採集されたものは雌とみられる成獣骨は1点もなく、顎骨はすべて

雄のものであった。この他に遊離した歯が多数あることから実際には下顎骨があったはずであるが、標本としては見ることはできなかった。

③ 肩甲骨

多くは破損しており、関節窩から肩甲頭部分を残す破片となっていることが多い。稀に肩甲頭部で切断したものがあり、単なる解体処理のためでないかもしれないものがある（P.L.106）。

④ 上腕骨

最も多くの標本を得ている。幼体から若（亜成獣）、成体までの標本が含まれ、保存も良好であることから、標本数も多くなつたものと思われる。ただ近位骨端までを残す完全標本は少なかった。肩関節を外すときに壊されることが多かったのである。 σ^{α} 成体の遠位骨端幅 88.0mm に達していた。

⑤ 横骨

破損される率の低い部位で、上腕骨に次ぎ、尺骨とほぼ同じ標本が保存されていた。成体骨格で全長 227.0mm 前後である。近位端骨端の外れた全長 100.0mm 前後の標本も多く、1~1.5 歳前後の個体と推定される。

⑥ 尺骨

この骨の保存状態も良好であった。近遠位骨端の完存する標本はほとんどなかつたが、充分に成育した個体と思われる標本をみることができた。数量的には若い個体が圧倒的に多い。幼体最大長 122.8mm 前後。

⑦ 寛骨

完存する標本は少なかつたが、寛骨臼周辺を残す標本は多くみられた。やはり幼体標本が多かった。

⑧ 大腿骨

標本がやや少なくなる。幼体標本が少ないので、骨格自体が小さくなり、失われるようなこともあったのかもしれない。 σ^{α} 成体大腿骨全長 132.8mm、143.9mm。幼体標本の完存標本では、最大長 62.8~76.5mm。

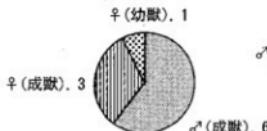
⑨ 脛骨

成体個体の標本数は、他の部位と大きく変わらないが。成体 σ^{α} は全長 258.0mm 前後、幼体標本は、最大長 62.8~76.5mm である。

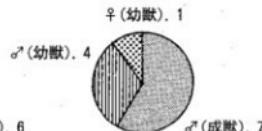
⑩ 跗骨

全長 68.0mm 前後である。

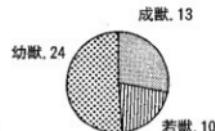
上顎骨と犬歯 (n=10)



下顎骨と犬歯 (n=12)



四肢 (n=47)



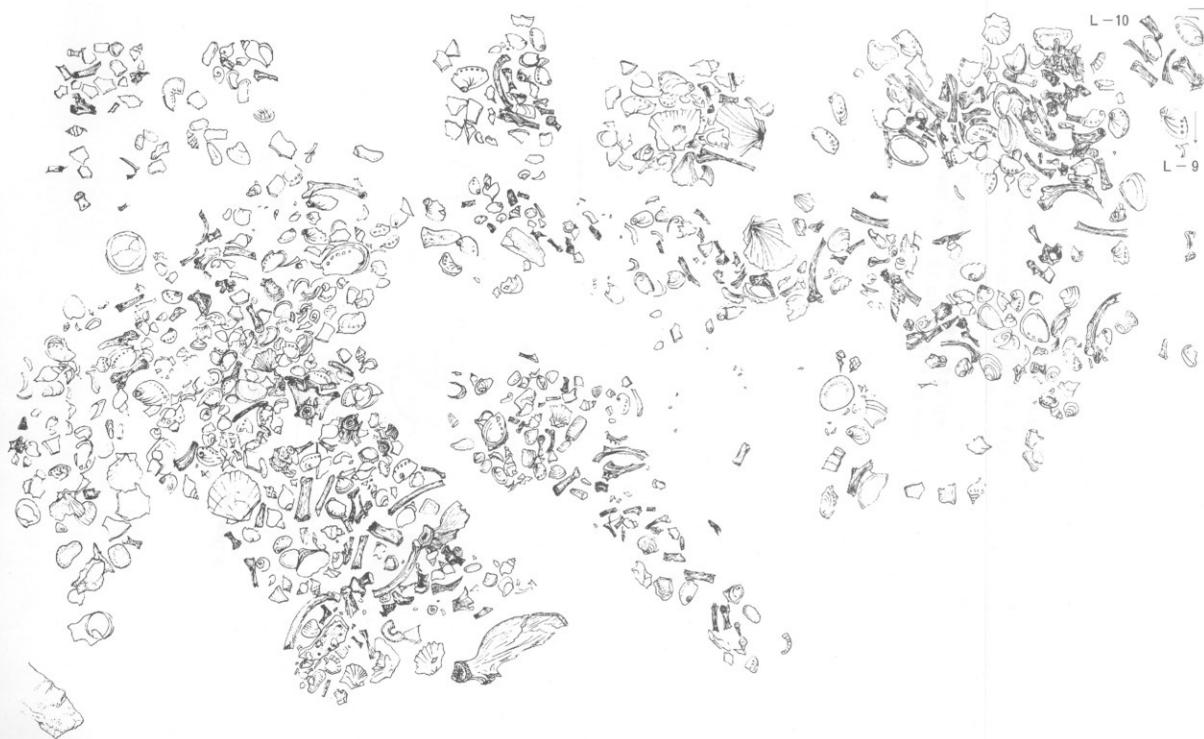
オス (成獣)	6
メス (成獣)	3
メス (幼獣)	1

オス (成獣)	7
オス (幼獣)	4
メス (幼獣)	1

	1層	2層	合計
(成獣)	5	8	13
(若獣)	3	7	10
(幼獣)	7	17	24

図III-1 青苗貝塚出土のアシカ最小出土個体数の出土量

(四肢で幼獣が多くなるのは標本が多いからであるが、これが一般的の傾向である)



図III-2 動物遺体分布図（L-10区）

表Ⅲ-1 魚骨集計表

カタゴリ				サッケ				カジカ整				タラ			
主上顎骨	上顎骨	胸骨	前鰓蓋骨	主上顎骨	上顎骨	胸骨	前鰓蓋骨	主上顎骨	上顎骨	胸骨	前鰓蓋骨	主上顎骨	上顎骨	胸骨	前鰓蓋骨
R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
I-7															
J-7 第1種	2		6	3	1	8	6	2	2			1	1	1	
第2種	1	6	4	2	3	5	6	4		1		1	1	2	1
第3種	26	28	35	31	47	42	16	15	40	32	24	20	3	1	4
貝類	3	9	4	5	1	1	3	2		1	7	5	1	2	6
計	31	31	45	40	56	49	17	19	51	44	26	26	3	1	4
J-6 第1種	2	1	1	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
第2種	1	5	2	5	1	1	5	1	1			1	1	1	1
第3種	19	27	49	45	44	41	24	19	35	64	27	20	1	1	10
貝類	9	15	12	16	7	5	8	14	11	8	7	2	1	1	10
計	39	37	67	60	62	55	31	27	52	73	37	37	3	5	13
J-9 第1種	1		3	2	4	1	3	1	2	1			3	1	1
第2種			1	1	1	5	1	1		1			1	1	1
貝類	6	5	1	2	4	5	2	3		1	1		2	1	1
計	6	6	1	4	6	7	4	5	13	4	3		1	2	1
K-7 梅1種	2	9	1	3	2	2	1	3	5	1	1	1	1	1	3
第2種	4	3	12	18	10	9	8	8	17	10	2	2	1	1	2
貝類	1	2	1	2	1	1	3	2	3		1	1		1	1
計	7	4	21	11	13	6	15	10	20	14	5	10	1	3	2
K-6 第1種	6	6	1	2	4	3	1	3	2	1			1	1	1
第2種	19	18	16	17	20	17	15	5	15	19	10	14	2	5	4
第3種	14	11	5	12	5	7	6	6	12	19	10	4	1	2	2
貝類	1	2	1	1	1	1	3	1		1	1	2	2	1	1
計	40	29	26	32	30	28	25	11	30	35	20	25	3	7	6
K-9 第1種	1	6	2	6	4	3	2	1	2	1			1	1	1
第2種	3	5	2	6	7	3	4	6	1	2	1		1	1	1
計	4	19	4	6	13	7	5	6	7	1	2	1	1	1	1
K-10 第1種	1		2	2	1	1				1	1				1
土 壤	1	1	2	1	1	1							1	1	1
計	1	2	2	1	3	2	1			1	1			1	1
L-10 貝類	6	7	6	5	8	6	4	11	8	2	2	1	1	2	2
M-10 滅1種	2	2	2	2	3	3	1	2	1		1	1	1	1	1
貝類	1	1	3	1	2	1	3	1		1			1	1	1
計	3	3	2	3	4	6	3	3	2		1	1	1	1	1
第1種 計	15	19	14	5	23	21	12	8	17	14	9	12	2	4	3
第2種 計	20	2	25	23	23	25	16	6	26	30	12	18	2	1	5
第3種 計	62	69	104	106	106	97	51	51	104	106	63	56	5	1	7
総 計	121	114	165	168	162	166	169	62	176	180	94	102	7	6	34
															23

表Ⅲ-4 アシカ類骨集計表（幼獣）

	頭蓋	上顎骨	下顎骨	上顎犬歯	下顎犬歯	頭椎	頸椎	肩平骨	上腕骨	橈骨	尺骨	寛骨	大脛骨	胫骨	距骨												
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L											
J-7 第1齢 貝齶									1	2	1	1	1	1	1	1											
									1	2	5	1	4	2	3	1											
J-8 第1齢 貝齶			1						3	1	3	2	3	1	1	2											
J-9 第1齢 貝齶									1	1			1														
K-7 第1齢 貝齶					1				2	1	1	1	2	2	1												
									2	1	3	2	1	1	1												
K-8 第1齢 貝齶						1			1	1	1	1	1	1	1	1											
									1	1	6	1	2	4	1	1											
K-9 第1齢 貝齶			1	2					3	3	2	1	1	1	1	1											
									1	1	1	1	1	1	1												
K-10 第1齢 貝齶									4	2	2	3	5	1	4	2											
L-8-9 第1齢 貝齶									1	2	1	1	1	3	2	1											
									2	2	5	3	2	2	1	3											
M-9 第1齢 貝齶									2																		
M-10 第1齢 貝齶									1		1	1	3	1	2	1											
N-10 第1齢 貝齶									1						1												
第1齢合計					1				3	6	3	2	2	5	5	4	2										
貝齶合計		1	5			1	1	2	8	9	11	18	12	9	14	8	11	15	15	9	8	7	1	1	4	1	
総計		1	5			1	1	1	2	11	14	14	24	16	12	16	13	16	16	20	13	10	11	1	3	6	2

表Ⅲ-5 アシカ類骨集計表（若獣）

	頭蓋	上顎骨	下顎骨	上顎犬歯	下顎犬歯	頭椎	頸椎	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	寛骨	大脛骨	胫骨	距骨									
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L								
J-7 第1齢 貝齶									1	1		1	1	1										
									2	1	1	2	1		2	1								
J-8 第1齢 貝齶												1		1	1									
J-9 第1齢 貝齶			1						1		2													
K-7 第1齢 貝齶														1										
K-8 第1齢 貝齶												1				1								
K-9 第1齢 貝齶									1	1	5	1	1			1								
K-10 第1齢 貝齶									2	1	1	1	1	1		1								
L-8-9 第1齢 貝齶									1		1													
												2												
M-9 第1齢 貝齶												1												
M-10 第1齢 貝齶												1				1								
N-10 第1齢 貝齶																								
第1齢合計									2	4	2	1	1	5	1	1	1							1
貝齶合計		1	1	1		1	1	3	2	1	2	2	8	4	3	1	2	5	1	1				
総計		1	1	1		1	1	2	4	6	4	3	9	8	4	1	1	3	5	1	1			1

表III-6 アシカ類骨集計表（成歯）

	頭蓋	上顎	下顎	上顎犬齒	下顎犬齒	複椎	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	腕骨	大関節	頸骨	蹠骨	距骨
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	R	L	R	L
J-7 第1種 貝珊瑚							1	1			1	1	1		1
			2			3	2		4	3		1	1	1	2
J-8 第1種 貝珊瑚			2				2	1	1	1	1	2	2	2	1
J-9 第1種 貝珊瑚						1		2	3		1	1	2		1
K-7 第1種 貝珊瑚								1			1	1			1
K-8 第1種 貝珊瑚						1	1		1	2		2	1	1	1
K-9 第1種 貝珊瑚			1				1	2		1	2	3		2	
K-10 第1種 貝珊瑚		1					1	1	1	2	4	1	5	2	1
L-8-9 第1種 貝珊瑚										1		1	1	2	1
L-10 第1種 貝珊瑚					1		1	1					1		
M-9 第1種 貝珊瑚	1	1					1			2		1	1	1	
M-10 第1種 貝珊瑚								1							1
N-10 第1種 貝珊瑚								1			2				
第1種合計	1					1	6	1	2	2	1	1	5	5	2
貝珊瑚合計	2	1	5			1	5	7	6	7	4	6	7	6	4
	3	1	6			1	6	13	7	2	9	4	7	8	11
															7

表III-7 アシカ類骨集計表（全体）

	頭蓋	上顎骨	下顎骨	上顎犬齒	下顎犬齒	複椎	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	腕骨	大膝骨	脛骨	蹠骨	距骨
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	R	L	R	L
J-7 第1種 貝珊瑚			2				3	2	3	2	1	1	2	1	3
	2		3	2	2	2	5	3	2	2	4	5	6	2	1
J-8 第1種 貝珊瑚	1							1			1		1	1	
J-9 第1種 貝珊瑚	10		2	2	2		3	2	5	4	1	3	3	4	3
	1		1	1	1	2	2	1	1	3	5	1	1	5	2
K-7 第1種 貝珊瑚		1			1		1	2	1	2	1	1	2	2	
	1	1				3	2	1	1	3	3	1	3	1	2
K-8 第1種 貝珊瑚	1	1					1	1	1	1	1	1	1		1
	2	3	3	3	1		1	4	6	3	4	7	6	3	5
K-9 第1種 貝珊瑚								2	3	2		2	4	3	2
K-10 第1種 貝珊瑚	1	1				1	1	1	2	3	2	3	8	6	3
	1							1			1	2	6	1	2
L-8-9 第1種 貝珊瑚		1						1	2		2	3	2	3	4
								1	1		1	1			1
L-10 第1種 貝珊瑚						1	1	1	3	1	1			1	2
M-9 第1種 貝珊瑚		3	3	1			1	2	2	6	3	2	2	3	4
							1	2		3	2	3	4	5	2
M-10 第1種 貝珊瑚									1						1
N-10 第1種 貝珊瑚	1	1					2	1	1	1	1	5	1	1	1
	1						1					5		1	1
第1種合計	4	1	1	3		1	2	4	11	10	9	10	3	6	7
貝珊瑚合計	15	9	9	12	2	5	6	2	3	16	16	19	12	28	19
総計	20	10	10	15	2	5	9	2	5	19	6	27	29	21	38
												34	32	24	32
												20	26	21	13
												12	10	10	11

第IV章 まとめ

1 青苗貝塚の動物遺体の特徴と擦文人の経済活動について

青苗貝塚の動物骨を特徴づけるもの一つに、アシカがある。すでに述べているように、本遺跡からは多数の骨が出土し、その中には雌雄、幼若成の様々な年齢階層のものが含まれ、この近くの水域に繁殖生息したアシカを捕獲していたことが考えられる。

遺跡から出土した生活の道具の中で鉛頭あるいはそれに付属する骨角器が主体を占めていたことも、青苗貝塚をつくった人々の生業のなかで、アシカ獵が主要な位置を占めていたことを示すものであろう。

アシカは肉・毛皮が主要な利用部分となつたはずであるが、犬歯に穿孔して垂飾品としているものもある。アシカの頭蓋は例外なくうち割られており、脳髓食の行われていたことを示している。かつて、札幌西高校で発掘調査した際、アシカの頭蓋の両側に穿孔されたものが7個集積していたという。その状況は、例えばオホーツク文化人によるクマ、シカ、イルカ、その他の海獣類などの頭蓋集積と同じではなかったかと言われている。もし、そうであるとすれば、ここに生活した人々の文化的な性格を考える上で重要な示唆を与えるものがあるであろう。生活の主要な資源を彼らがアシカより得ていたとすれば、アシカに対しての何らかの狩猟儀礼的なものがあったのは当然と思われる。ただ、今回の調査の場合には、それがかなり広い範囲であったにもかかわらず、こうした頭蓋集積的なものが全く見ることができず（頭蓋はすべて著しく破損し、脳髓摘出の加工があったことのみ認めた）、頭蓋集積について具体的な在り方を確認し得なかったのは残念であった。

次に、陸獣類については、それらがいずれも数が少ないことはすでに述べた。陸獣類は、この島では殆ど行われなかつたと見てよいであろう。この点は、同じ島の遺跡の場合でも、オホーツク文化の場合で、キツネなどの捕獲をしているとの対照的である。このことはまた、本貝塚からイヌの遺体を殆ど出土しないことと関連しよう。狩猟民にとってイヌは大変重要な家畜であったからである。

もちろん、僅かではあるがイヌの骨の出土は確認されているので、イヌがいたことは事実であろうが、青苗貝塚をつくった人々の生活には、直接的には関わりがなかったと思われる。

この点においてもまた、オホーツク文化の遺跡例の、礼文島香深井遺跡と著しい対照を示すものである。香深井遺跡の調査では多数出土したイヌの遺体には明らかに食用にされた痕跡を残すものがあった。おそらく、それは食料の乏しい冬季の食料に当たられ、毛皮などに利用されたのである。ところが、同じような条件下にあると考えられる奥尻島の青苗貝塚の場合は、イヌをほとんど見なかったのであるから、イヌを使っての陸獣獵もなく、また、食用にすることもなかったと考えられる。このことは同じ島嶼部の生活においてもオホーツク文化と擦文文化との間におおきな差異があること、それも本質的な経済基盤の違いがあつたのではないかと思うのである。おそらく擦文文化期の人々は、この島の生活を自然の条件に応じて季節的に利用し、さらにより安定した生活条件があつたのではないか。それは別に述べるような、交易による物質の調達によって裏付けされたものがあつたのである。いずれにしても、その基盤の一つをつくったのは海獣獵であったと考えられる。こうした差異を一層興味あるものとして示すのは、奥尻島のほぼ対岸位置にある瀬田内チャシ跡遺跡より出土した動物遺体との比較であろう。瀬棚町、北檜山町にまたがって存在するこの遺跡の発掘調査によって、その性格がだいに解明されつつあるが、そこからは、かなりの量の動物遺体が発見され、その概要が報告されている。それによると獸骨にはエゾシカ、イヌ、ヒグマ、トド、アシカ類が多く、なかで

図IV-1 青苗・香深井・オンネモト・瀬棚内チャシ貝塚の脊椎動物遺骸の最小個体数比較表

魚類

種類	遺跡名	青苗		香深井(三層)		オンネモト		瀬棚内チャシ	
		個数体	%	個数体	%	個数体	%	個数体	%
ニシング				47,770	51.8			39	37.9
カサゴ	194	66.4		8,540	10.4	6	4.8	16	15.5
ホッケ・アイナメ	16	5.5		15,530	19.0	1	0.8	7	6.8
カジカ類	42	14.4				22	17.6		
マダラ(コマイを含む)	27	9.2		3,990	4.9	30	24.0		
カレイ類	13	4.5		6,070	7.4	66	48.0	1	1.0
ウグイ								25	24.3
その他								15	14.6

鳥類

アホウドリ	6	9.4	11	19.2	23	28.8	1	7.1
ワシ類	34	33.1	15	26.3	47	58.8	4	28.9
ウミガラス	3	4.7	17	29.8				
ワシ・タカ類	1	1.6	2	1.8			4	28.6
その他	20	31.3	12	21.1	10	12.5	5	35.7

哺乳類

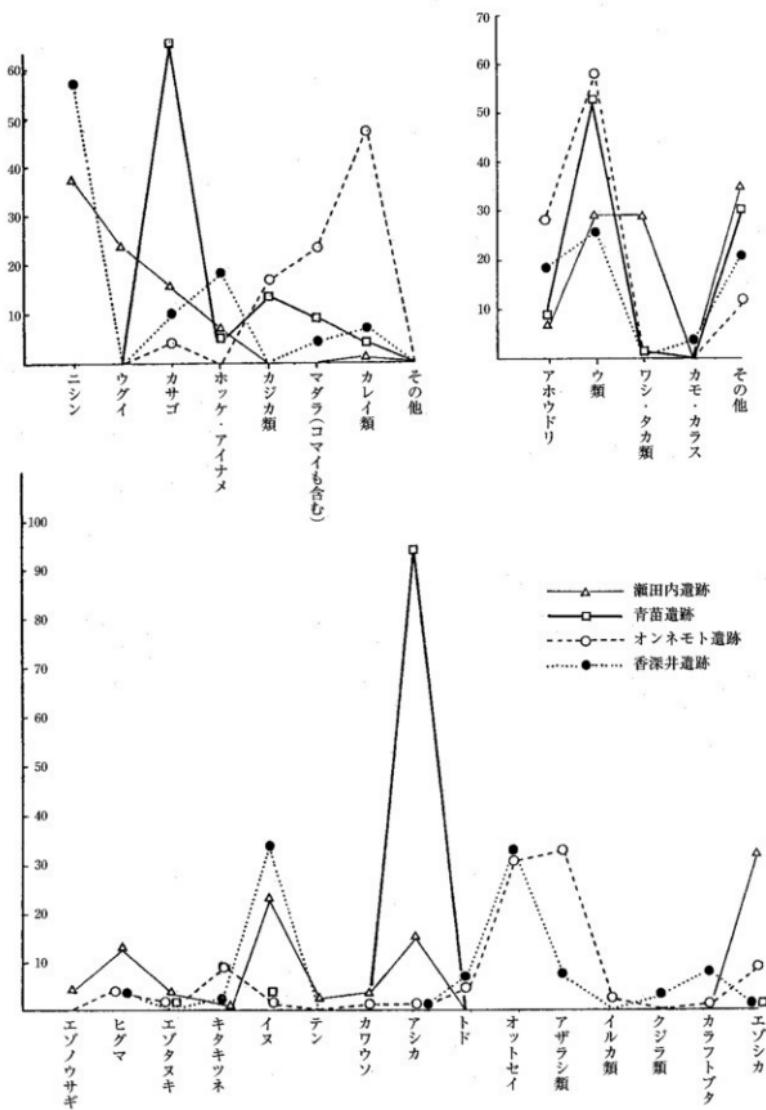
エゾノウサギ				2	0.9	6	4.5	
ヒグマ		4	3.1	8	3.9	18	13.6	
エゾタヌキ	1	1.4		3	1.5	5	3.8	
キタキツネ		3	2.4	19	9.8	2	1.5	
イヌ	2	2.8	45	35.4	3	1.5	32	23.5
テン						3	2.3	
カラワソ				1	0.5	4	3.0	
アシカ	64	94.1	1	0.8	3	1.5	20	15.2
トド			8	6.3	10	4.9		
オットセイ		42	33.1	64	31.4			
アザラシ		9	7.1	68	33.3			
イルカ				4	2.0			
タジラ類		4	3.2					
カラフト豚		10	7.9	1	0.5			
エゾシカ	1	1.4	1	0.8	18	8.8	43	32.5

も、シカ、イヌ、ヒグマが多かった点は、青苗貝塚と対照的であったと言えよう。しかも、イヌは食べられていた形跡があったというのである。ほぼ16世紀といわれるこのチャシ跡出土の動物遺体の状況と直接関係づけて論することはできないが、その形成に関わった人が残したものであるに相違なかろう。にもかかわらず、このような差異が見られたのは島嶼と本土というべき条件からの違いとみてよいであろう。もし、この青苗貝塚がここに年間を通して長く住み着いた人々によって形成された遺跡であったならば、例えばイヌの飼育や屠殺も行われていたであろうし、骨角器の材料となった鹿角などもさらに多く出土するのではなかろうか。そうした様相が見られないのは、青苗貝塚をつくった人々の生活がやはり季節的なものであったからであろう。冬には本土に帰り、そこで冬を越し、翌年のために道具を用意したり生活の準備をして島に渡ったと推測される。その時期は、アシカが繁殖のために集まる春から夏にかけてではなかったろうか。

勿論、このあいだ、アシカ獵にあたると同時に、アワビの採取あるいはその他漁業に従事したのであろう。

青苗貝塚の魚種は、主体となる魚が殆どカサゴ類に限られている。先述の瀬棚内チャシの例ではカサゴ類の他にニシン、ウゲイ類、ホッケ、サケ類も多い。青苗貝塚でニシンやサケ類をみないのは、ここに住んだ居住期間とニシンの回遊期とがずれているということも考えられよう。

青苗貝塚の主要な漁業の対象は魚ではカサゴ類であり、おそらく彼らの食料源の一つになったであ



図IV-1 青苗(掠文期)・香深井・オンネモト(オホーツク)・渥美(17世紀)
における脊椎動物遺体の最小個体数比較図

ろう。貝殻ではアワビが大量に捕れており、これは瀬棚内チャシ跡遺跡あるいは上之国勝山館跡の貝塚、その他、アワビを主体とする貝塚は、擦文期及びそれ以降の時期の特徴といえる。

以上、青苗貝塚の動物遺体にみる主要な採集・捕獲活動について述べてきた。これらの動物遺体の示す青苗貝塚の経済活動は、特定の貝類、獸類を目的とした捕獲活動が中心となり、それは交易品としての価値が当時あったからに他ならないからであろう。

アシカ類は、肉はおそらく彼等の食料となったであろうし、また、犬歯に穿孔して垂飾とするようなことも行われた。しかし、この犬歯垂饰品は、多くのアシカが捕獲され、素材があったにもかかわらず加工品は極めて少ない。これは当時既に、こうした垂饰品の意義が失われてしまったからに他ならない。捕獲したアシカと人間との直接的な結びつきが失われ、あるいは装飾品としてさらに関心のそそられる品物が別に出来てしまったからであろう。

アシカ類の毛皮、油、アワビの干し貝は、この島でのもっとも重要な産物であったろう。ワシ類の骨もあることから、矢羽根となる鷺羽がとられたことも推測できる。また、昆布などの海藻類の採られたことはもちろんであろう。

青苗貝塚をつくった人々の生活は、島においては基本的に採集、狩猟、漁撈に依存するものであったが、本島においてはある程度農耕に従事する人であったと考えられる。このような経済的な基盤の上にあって、これらの人々が積極的かつ広範に進めていたのは、これらの資源を交易として流通させることであったと思う。このような資源が、これを多産しない地域において極めて価値のあるものであることは既により早くから知られていたと考えられる。擦文化の成立とその展開は、この北辺地域に新しい交易文化圏を形成させながら、品物だけではなくおそらく人々もまた動き、その先々であらたな文化接触を誘発せることもあったのであろうし、そのような文化の様相を青苗貝塚にみてみた。擦文化の経済的基盤を、単純に狩猟、漁撈と一部に行われた原始的な農耕よりもなるといった単純な図式的説明では、事實を把握しえないことは言うまでもない。しかし、これを考古学的に解明してゆくにはなお、明らかにされていない比較資料との検討が必要である。例えば、本遺跡を考えるうえで重要な、積丹半島神恵内村觀音洞窟の資料もその一つであるし、太平洋側の虻田郡豊浦町小幌洞窟の資料も動物遺体については知られる内容がきわめて限られる。小幌洞窟資料については、遺物についての調査、再検討を進めており、これらの成果をまって、改めて青苗貝塚の文化の問題も触れたいと考えている。

2 青苗貝塚銛頭の形態的特徴とその系譜

はじめに

筆者は骨角製品の研究で、その形態の考察の基礎に、素材と製作技術、工程の研究が重要であることを常に述べてきた。それは時代と地域を問わずに問題とされる部分であったと思う。青苗貝塚の骨角製品を述べるに当ってもこの点について留意してゆきたい。先に銛頭については、その分類を行ったが、また視点を変えてその特徴を論じてみたい。

(1) 北海道における銛頭の概要

北海道古代の重要な骨角製品の一つに銛頭があるが、この製品は、機能的には銛としての用途を備えた効果的な道具として、早くから登場し、以後形態変化をつづけた。これについてはかつて1972年に行われた北海道島牧村栄磯岩陰遺跡の調査の発掘資料に基づき、石器時代の形態変遷の試論を述べた

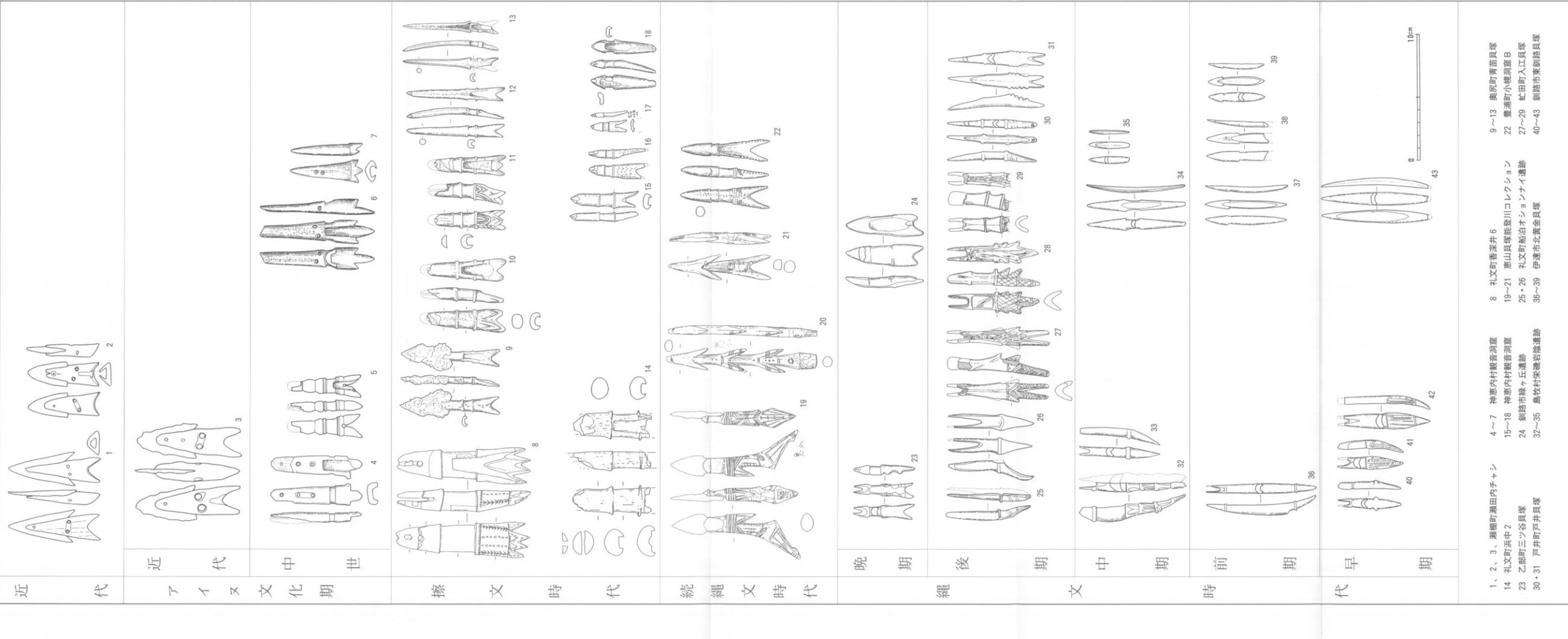


図2 縄文期よりアイヌ文化期に至る器物の系譜

- 1、2、3、瀬棚町瀬内チャシ 4～7 神恵内村観音洞窟
 8 礼文町香深井 9～13 奥尻町青苗貝塚
 14 礼文町浜中 2 15～18 神恵内村観音洞窟 19～21 惠山貝塚能登川コレクション
 22 豊浦町小幌洞窟日
 23 乙部町三ツ谷貝塚 24 剣路市緑ヶ丘遺跡 25・26 礼文町船泊オショナナイ遺跡
 27～29 虹田町入江貝塚
 30・31 戸井町戸井貝塚 32～35 鳥取村米崎岩陰遺跡 36～39 伊達市北黄金貝塚
 40～43 刈谷市東創路貝塚

ことがある。筆者はこれより早く釧路市東釧路貝塚の調査に関わり、動物遺体の調査とともに、骨角製品の分類、考察を行ってきた。東釧路貝塚の鉢頭は早期にもかかわらず、開窓式鉢頭の形態をつくり、根バサミをつくり、尾部に線刻を施す入念さであった。海獣類肋骨は素材となり、特有の形態を作り出していた。前期の北黄金貝塚例は豊富なオットセイの遺体の出土を反映して、優れた形態の鉢頭を作り出している。それはこの種の製品のたどり着いた頂点の一つであった。これにも地方差があるらしい。

この形態が以後どのように展開するのか、図りがたい謎であったが、それを教えてくれたのが栄磯岩陰洞窟の資料であった。この洞窟資料は空白部分であった中期と、晚期初頭期の資料を提示し、空白を埋めた。栄磯岩陰の装飾彫刻をつける大形鉢頭はその前後に類品をみない。この鉢頭は鹿角製であることに大きな関心をもったのである。

後期の鉢頭の内容は近年の規模の大きな発掘で多くの資料をえている。虻田町入江貝塚例は優美な製品を作りだし、ひとときは目立つ。ここで略述することはできない程の内容であり、もっとも華やかな製作であった。これまでの柳葉形から柳葉・長先端型ができ、根バサミの発達と多分枝尾部における線刻の発達が特徴的である。また、礼文島オションナイ遺跡その他にみられた大形根バサミをもつ鉢頭は形態的にも特徴的である。これらの多くが鹿角製であることを確認している。この段階に鉢頭の新しい変化がみられるようになる。

晚期から続縄文にかけて、さらにまた新たな変化が見られるようである。閉窓式で根バサミをもち、器体全体に線刻を発達させる形態のものと、同様に線刻を発達させる有孔単純鉢頭系の製品が特徴的である。この鉢頭にも地方形があり変遷の過程が異なるようである。

やや異常のように発達した続縄文期の鉢頭は、その後の文化の中になにも残すものがなかった。石器時代の鉢頭製作の文化がこれで終焉したかどうかはなお問題であるが、擦文期にいたって鉢頭製作に労力を傾注した人々がいた。その中心にあったのが青苗貝塚とともにあった人々であった。

擦文期の青苗貝塚の人々によって製作された骨角製品は、海獣犬歯に穿孔した垂飾品、針類などがあったが、それらはごく少なく、鉢頭の製作に専念したようである。従ってその製作された個数は多く、またその製作はすぐれた技法をもち、群を抜く存在になったのではないかと思う。素材と鉢頭の形態が一体化し、効果を高めたのである。そして、このことが奥尻島周辺の発達した岩礁地形海岸や狩猟環境と無関係でなかったことは勿論である。

(2) 青苗貝塚の鉢頭

鉢頭の基本形はすべて開窓式で構成されていた。しかし、実際の製作、使用に当っては、素材の使い分け、効果を考えていたようである。

I アシカ肋骨製の鉢頭（1～3）

a やや華奢ともいえる細く長い先端部と2叉する尾部をもつ。この形態は縄文時代後期にさかのぼり、2叉する尾部も時折はみられたが、先端部の長い柳葉形は擦文期鉢頭において定着化し、青苗貝塚において精美された形態を作りだし、さらに装飾的効果も意識してつくられた。

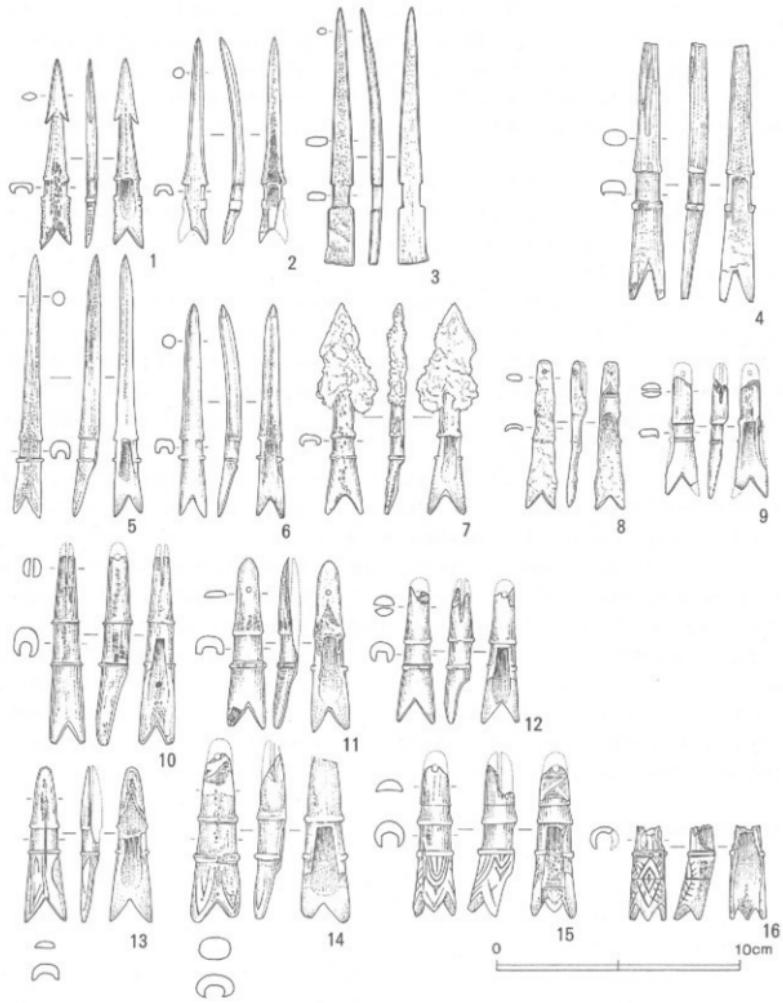
b 逆刺をつける1例があるが、均整のとれたつくりである。この製品の尾部両側には細かな刻みをつけ装飾的である。

II 鹿角製

半截鹿角枝をつかう

① 長い先端部と2叉する尾部をもつ（4～6）。

基本の形態はIのアシカ肋骨製品と変わらないが、はるかに厚みをもち、索溝は深い。既述のように柳葉・長先端型は縄文時代後期に例があるが、擦文期の青苗貝塚例は形態的に安定して優美なつく



図IV-3 青苗貝塚出土の鉈頭（1～13海獣肋骨製、4～16鹿角製）

りである。

② 鉄の鉈先刃をつけ、尾部は2叉

- a 全長60cm前後：器体細めで華奢なつくり（7～9）。
 - b 全長70cm前後：幅広く、尾部に線刻することがある（10～12）。
- ③ 鹿角枝をそのまま使う
- a 尾部が2叉（13～14）。

b 尾部が3叉（15・16）。

開窓式ではあるが深いソケットがつくられ、安定した鉛頭の保持によって、鉛頭の獲物への刺突と保持を容易にした。そして、最も効果ある鉛頭としての価値を複雑な線刻文様に示したのである。

以上が青苗貝塚の鉛頭の形態分類の基本についての筆者の考え方である。この擦文期終末の製品—あくまでこれは道南地域における擦文文化による鉛頭の一例であるが—が成立するためにはそれ以前の続縄文期以来の、また、オホーツク文化の製品との関わりも考えられるところである。さらに擦文期以降アイヌ文化成立過程における鉛頭の形態の変遷も研究の課題である。これらの資料について修正され、問題の整理が行われ、論議されているが、種市幸生氏によって全道的な視野のなかで丹念な研究が発表されている。したがって、いま改めて論述することはさけて、筆者がこの報文を製作していた1980年頃、同志社大学において実測した神恵内観音洞窟出土の資料をもとに編年表なども作っていたのでそれに続縄文期の例を加え、参考とするべき表を提示し、多少説明を加えることにした。

3. 青苗貝塚出土の有栓弭型骨角製品について

有栓弭型骨角製品あるいは弭型有栓骨角製品と呼ばれる製品が青苗貝塚からは3点出土している。この時期の1遺跡からの出土量としてはもっとも多い。調査面積の広いことを考慮すると3点は特例というわけではなかったかと思われるが、この種の製品がここで作られ使用されたことに興味を覚えるのである。3点の製品は細部では形態の異なる点があるにしても、基本的には共通の形態をもつものであった。やや内傾した三角形の頂部に栓を埋め込む穿孔が、また、三角三点に配列するのは形態的にも利に適った存り方といえよう。ところでこの骨角製品に付属すると考えられる栓は2点とも残されておらず、また、検出することもできなかった。

先にも述べたように、3点は共通した形態をもつが、1点（A）は微細な彫刻の施されるもので、これほどの彫刻を持ち製品は他には見ず、異国的といえる風情である。そしてまた、こうした彫刻が必要とした道具とは何であったのかと考えるのである。他に2点（B）は実に簡素なつくりであるが、頂部から重なるような積み上げ彫刻は、一種の重量感をつくりだしている。1点は完成品で、他の1点は未製品と思われる。穿孔された2例は器体部を欠損するが、未穿孔品は器体部を完存、全体の形をうかがうことができ、穿孔されている2例も同じ形の器体部であったろう。

さて、青苗貝塚の製品に系統を引くと考えられる製品が、道東地城でも出土している。網走地区の広瀬遺跡の1例、さらに東の斜里オタフク岩遺跡の2例である。これらが青苗貝塚のB類の系統であることは明らかであり、青苗貝塚のやや簡素化した製品であろう。ところでこの種の製品が、アイヌ文化のなかにどのように見られるかということは、当然の帰結として注目されるべきことである。オホーツク、擦文文化の中にこれほど製作されているのだから、アイヌ文化の中にあってもよいし、もしされで用途が推測されるとすれば、一つの推理の資料になると思われる。ここで注目されるのが、室蘭絵柄遺跡のアイヌ墳墓から検出された製品である。

室蘭半島の先端部にあって、エンルム・チャシ岬とよばれ、標高15mの台地上で、通称エトモ・チャシといわれる。ここで1969年溝口 桐氏により続縄文期からアイヌ期に至る墳墓が調査され、そのうちアイヌ文化期の墳墓3基を調査、うち14号といわれた墳墓は、成年女子を葬った墓であった。

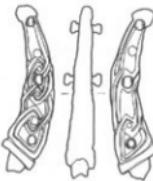
『長方形の墳墓で、仰臥伸展葬』

副葬品に『骨製鉛の柄（鉛先は鉄）1、短刀（竹刀）1、骨製マキリ（柄が骨製）1、刀子1、小刀の柄（骨製）1、ヤス先または矢柄と思われる骨角器9、根付（骨製）1、ヘアピン1、漆器丸盆

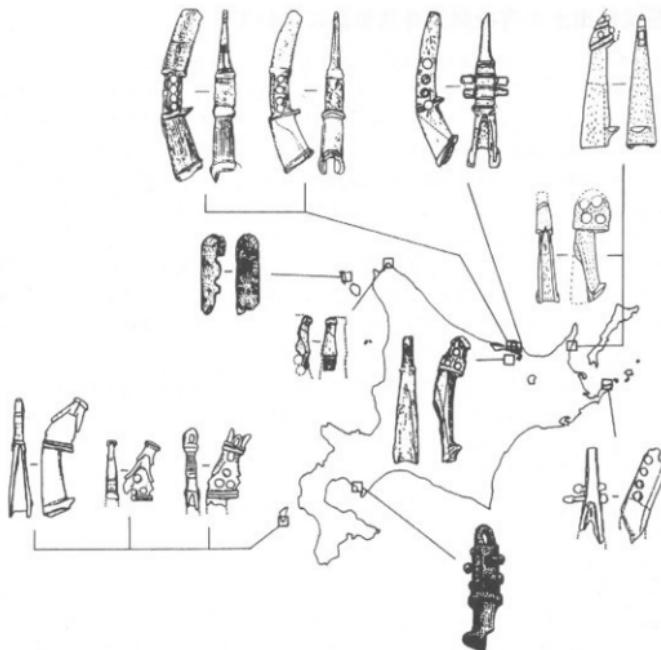
1 があった』

報告された溝口氏は『アイヌ期墳墓としては古く、500年（室町期）以前と考えられる。「小刀柄」としたのは、3ヶ所に穿孔をもつ、丸彫りである。そして、その彫刻文様の精巧さと美しさが見事である』と説明されている。

この小刀の柄にみる加工は「有栓彌型骨角製品」と同様であって、着柄部の形が違うだけである。着柄の方法が単純化したと思われる。アイヌ文化における唯一の遺物である。「マキリ柄」と「小刀」とは共通の文様構成をもち、特に輪を繋ぐ鎖状の文様が要素の一つになっている。この文様はアイヌ文様の代表的なかたちの一つで、「花矢」などにもみることができる。青苗貝塚の彌型鹿角製品の穿孔部は素文であるが、その頂部と周縁に付く刻みと頂部の彫刻は、エトモ・アイヌの「マキリ柄」の彫刻に共通性がある。なお、本品の茎部については破損のために形状を確認で



図IV-4 室蘭絵柄遺跡14号墳
墓出土の「小刀柄」



図IV-5 北海道における有栓彌型鹿角製品の分布
(弓彌状有栓骨角製品について『石守晃 群馬考古学手帳Vol.4』より引用)

きず、他の製品とおなじであるか不明である。

青苗貝塚の有栓彌型骨角製品とエトモ・アイヌの「小刀の柄」にみる共通性に注目すると、その用途の上でも共通するものがあったと考えるのである。

有栓彌型骨角製品あるいは彌型鹿角製品については、その興味ある形態からこれまでに種々論議されてきた。青苗貝塚資料もすでに系統図中に加えられ引用されている。筆者としては、上記の観察結果を述べて、関連資料との関わり方を述べるに止めておきたい。そして、さらなる関心はのもたれるのは、この道南のしかも日本海岸の孤島に忽然と現れたこの特殊な青苗貝塚の製品の系統をどのように考えたらよいかということである。

あとがき

『奥尻島青苗貝塚出土の骨角製品と動物遺体』の調査と報告について

青苗貝塚出土の骨角製品と動物遺体の研究分析については、佐藤忠雄氏から依頼であった。その発掘現場を実査し、さらに整理も現地において行われた。青苗貝塚については、かつて筆者が在学した早稲田大学の考古学会機関誌『古代27号』1958年にこの貝塚の小報が掲載され、承知していた。この調査は1956年に行われたものである。筆者が北海道の動物遺体について意識的に調査する以前のことであったが、北海道の諸文化に対する関心は既にもち、1953年の夏休みに、北海道への旅を計画し、かなり広い範囲を回った。函館を皮切りに、途中いろいろな遺跡に立ち寄り、道東は釧路から網走を経て札幌に至った。札幌では北大で行われていた人類学、民族学の大会に出席して帰ったが、この旅行で北海道各地域での種々の動物遺体の在り方を知ることができ、参考になった。上述のように青苗貝塚の骨角製品と動物遺体の調査は、佐藤氏の要請であると同時に私の強い学問的関心もあったからである。その後、北海道各地、各遺跡の貝塚の動物遺体を調査、報告する機会をもったが、擦文期の貝塚に

ついては小幌洞窟などの報告例を知るのみであった。そのこともあって佐藤忠雄氏からの要請があったときには、この貝塚の重要性からもできる限りの努力をする考えであった。また1984年の故石附喜三男氏、千代翠氏による神恵内観音洞窟の発掘と報告にも関わることができ（それは青苗の資料を整理している最中であった）、両遺跡の比較には大きな関心をもったが、石附氏の逝去によって志半ばに終わっていることは、調査を推進させていた石附氏のことを考えると痛恨の思いである。

青苗貝塚の発掘に筆者が初めて参加したのは1976年11月5日であり、翌77年6月、さらに7月にも渡島した。当時は教職についてたが、できる限り調査に参加し、遺物の出土状況を詳細記録した。筆者の野帳には、出土した動物骨格についての記録が漏らさず記入されている。佐藤氏製作の図面についても、記入作業を東京で行っている。動物遺体の整理には発掘後に78年10月奥尻島に渡り、全資料を検討して、出土数を表に作成した。写真的撮影は、79年1月佐藤氏宅において行われたが、もちろん筆者が立ち会ってのことである。さらに、道埋文センターの大沼忠春氏から、かつて青苗貝塚からニホンアシカの頭骨が出土していて、これが道開拓記念館に収蔵されていることも確認、これも図録に収録した。もちろん青苗貝塚の報告での参考資料として掲載するつもりであった。図録はこの年3月裏付けで『奥尻島青苗遺跡・図版編』として刊行されている。その後佐藤氏から報告書作成についての種々の連絡があり、骨角製品については、すでに佐藤氏とその協力者による実測図ができていたが、主要骨角製品の実測図は私が作り直した。原稿の作成にかなりの時間を要したのはもちろんである。さらに比較資料との検討を行うために、80年の8月には北大の植物園博物館その他の施設に収蔵されているアイヌ資料、考古資料を計画的な調査を行った。これについては当時北大にいた西本豊弘氏の協力をえた。

しかし、報告書作成についての連絡はその後途絶えがちで、東京で佐藤氏に直接会い、出版計画を聞いたこともあったが、全く途絶えるに至った。1993年7月には未曾有の大災害が起きたこともあり、止むをえないことなのかとも考えていた。しかし、資料集が刊行されていることから、この遺物は当然注目されていた。私としては遺跡に携わったものの一人として、調査研究を行い、最終的な責任を果たすのが当然と考えてきた。そうでなくとも、なり振り構わず資料を横取りする風潮が、研究者にあるのが昨今である。今回も早稲田大学の筆者の研究室に保管されていた資料を、私に無断で移動

させたのは、不信の念を拭い難いが、町教育委員会の当を得た計らいに、私は町学芸員の木村哲朗氏の協力を得て、刊行に協力するものである。そして、木村氏とも図ったのであるが、青苗貝塚の全資料の完全な整理とデータ化を考えている。これが今後のわれわれの仕事になる。

なお、文末になったが、青苗貝塚遺物の報告にあたっては奥尻町教育委員会社会教育課の方々に編集をはじめ多方面にわたり協力していただいた。厚くお礼申し上げたい。また北海道埋蔵文化財センターの種市幸生氏、土肥研晶氏からも種々ご教示いただいたことは有り難く御礼申し上げたい。

〈2003. 1. 4 金子浩昌〉

参考文献

- 石川 朗・金子浩昌：釧路市幣舞遺跡調査報告書IV 北海道釧路市埋蔵文化財センター 1999、3
- 石川直章：回転式鉢先再考 時の鉢～石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編 1998、5
- 石附喜三男：アイヌ文化の源流 北方考古学叢書－2 みやま書房 1986
- 石附喜三男・石川直章・金子浩昌：神恵内村觀音洞窟 神恵内村教育委員会 1984、
- 石守 晃：彌状骨角製品について、群馬考古学手帳Vol4、1～22、群馬県土器観会 1994
- 宇田川洋：北方地域における開窓式鉢頭について（1） 北海道考古学 第23車耳 1987、3
- 宇田川洋：北方地域の古代弦楽器試論、「考古学と民族誌」六興出版198～214、1989
- 宇田川洋：ところの民俗考古学－とんこりと常呂－「北の異界 古代オホーツクと水民文化 東京コレクションⅦ 2002、5
- 大場利夫・大井晴夫：香深井遺跡（上） 1976
- 大場利夫・大井晴夫：香深井遺跡（下） 1981
- 金子浩昌：北海道縄文時代の骨角製鉢頭と栄磯岩陰遺跡出土の資料 栄磯岩陰遺跡発掘報告 北海道島牧村教育委員会 1973
- 金子浩昌：鉢頭の変遷 歴史公論 5 雄山閣 1980
- 金子浩昌：未製骨角器ならびにその製作過程 オンネモト遺跡 東京教育大学文学部 1974
- 金子浩昌・西本勝弘：北海道・本州東北におけるオットセイ獣の系譜 季刊考古学11 1985
- 木村哲郎：青苗B遺跡 奥尻町教育委員会 1998 3
- 久保 泰：札前 松前町教育委員会 1985
- 河野広道・沢 四郎：東釧路 釧路市教育委員会 1962
- 桜井清彦：北海道奥尻島青苗貝塚について（第1次調査概報） 古代27 早稻田大学考古学会 1958、2
- 佐藤和夫・金子浩昌・末光正卓・土肥研晶：白老町虎杖浜2遺跡（2） 諸北海道埋蔵文化財センター調査報告書
第172集 2001
- 佐藤忠雄・金子浩昌：奥尻島青苗遺跡・図版編 函館土木現業所・奥尻町教育委員会 1979、3
- 佐藤忠雄：奥尻島青苗遺跡 奥尻町教育委員会 1981 3
- 佐藤智雄・五十嵐貴久：能登川コレクションの骨角器について 私立函館博物館研究紀要 第6号 1996
- 上奈徳美：縄文時代礼文島での海獣狩猟 加藤晋平先生古希記念考古学論集 2001 12
- 鈴木和夫：奥尻島調査報告 曇幌西高鄭土文化研究所 獅子の今昔一創刊号 1949、10
- 高橋 健：統撰文前半期の鉢頭の研究 東京大学考古学研究室 紀要16号 2001
- 竹田輝雄はか編：神恵内村觀音 2号遺跡発掘調査報告書 小樽市博物館 1982
- 田部 淳：ヘロカルウス遺跡E～G地点 泊村教育委員会 1996 3
- 種市幸生：「抉入離頭鉢」とキテの成立過程 栄浦第二・第一遺跡 常呂町教育委員会 1995
- 種市幸生：キテをめぐる諸問題～前編 列島の考古学 1998
- 種市幸生：キテをめぐる諸問題～後編 時の鉢～石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編 1998、5
- 名取武光・峰山巖：入江貝塚 北方文化研究報告13 1958
- 西川博孝：有栓弓耳とその系譜、先史考古学研究 第8号45～65 阿佐ヶ谷先史学研究会 2001、11
- 古屋數則雄・西本豊弘：戸井貝塚Ⅲ 縄文時代後期初頭の貝塚の発掘調査報告書 北海道亀田郡戸井町教育委員会 1993
- 北海道室蘭市：室蘭駄筋遺跡発掘調査報告書、1971、3
- 前田 潮：據文化の回転式鉢頭 国立民族博物館研究報告 第70集 1997
- 前田 潮・藤沢隆史・内山幸子：北海道礼文町 香深井6号遺跡発掘調査報告書北海道礼文町教育委員会 2001 3
- 前田 潮・山浦 清・川名広文：北海道礼文町 浜中2号遺跡の発掘調査 北海道礼文町教育委員会 1992
- 溝口禾周：（続）室蘭駄筋遺跡A地区、アイヌ文化期墳墓と副葬品について、「第10回、高文連郷土研究会、室蘭大谷高等学校郷土研究部、1976年1月
- 溝口禾周：『遺稿』室蘭地方におけるアイヌ文化期墳墓と副葬品について、アイヌ地方史研究13、1979、3月、室蘭地方史研究会
- 峰山 巖：瀬内内チャシ跡遺跡発掘調査報告書 北檜山教育委員会 1980
- 森 広樹・久保 泰：渡島半島南部の據文化時代の防禦集落 考古学ジャーナル・387 1995
- 渡辺 誠：縄文時代の漁撈 雄山閣 1973

写 真 図 版



貝塚の調査状況



貝塚断面



遺物出土状況



貝殻等出土状況



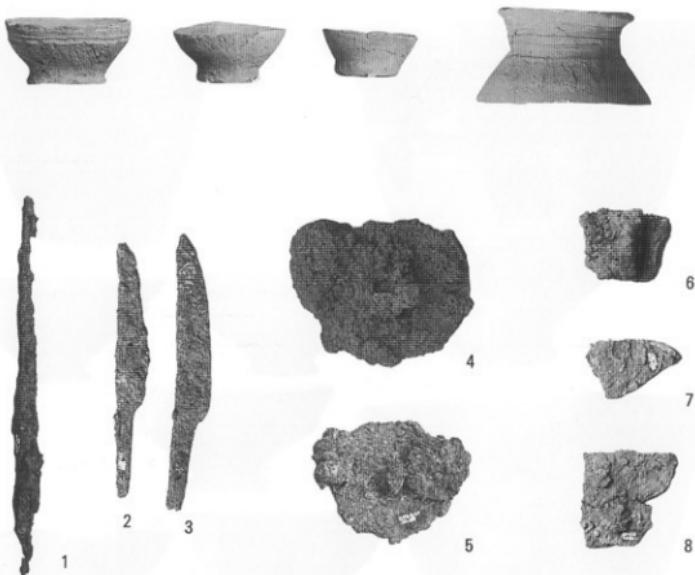
貝塚出土土器 (1)



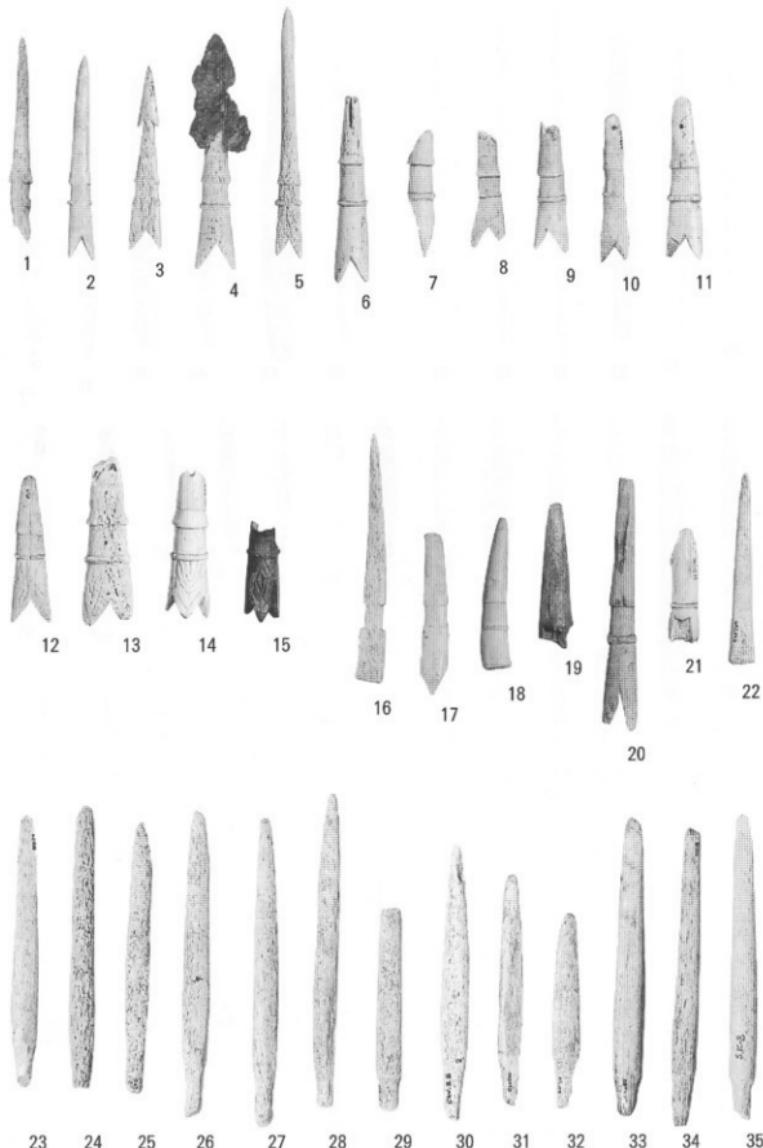
貝塚出土土器（2）



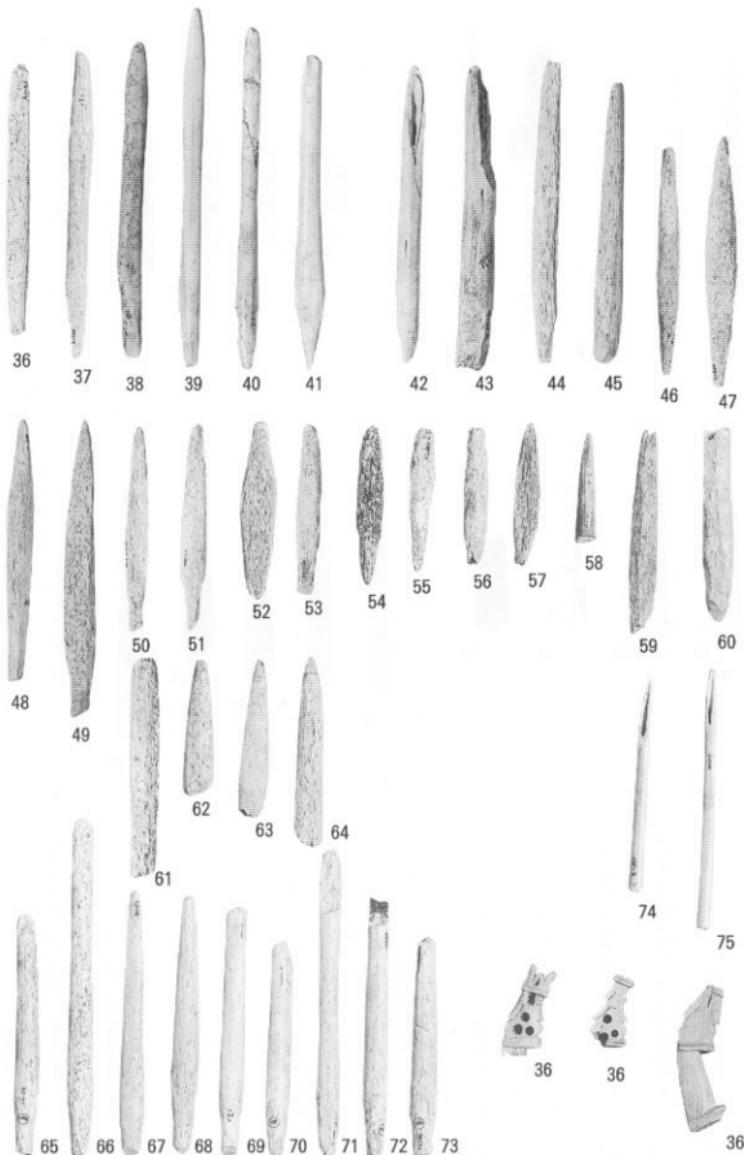
貝塚出土土器 (3)



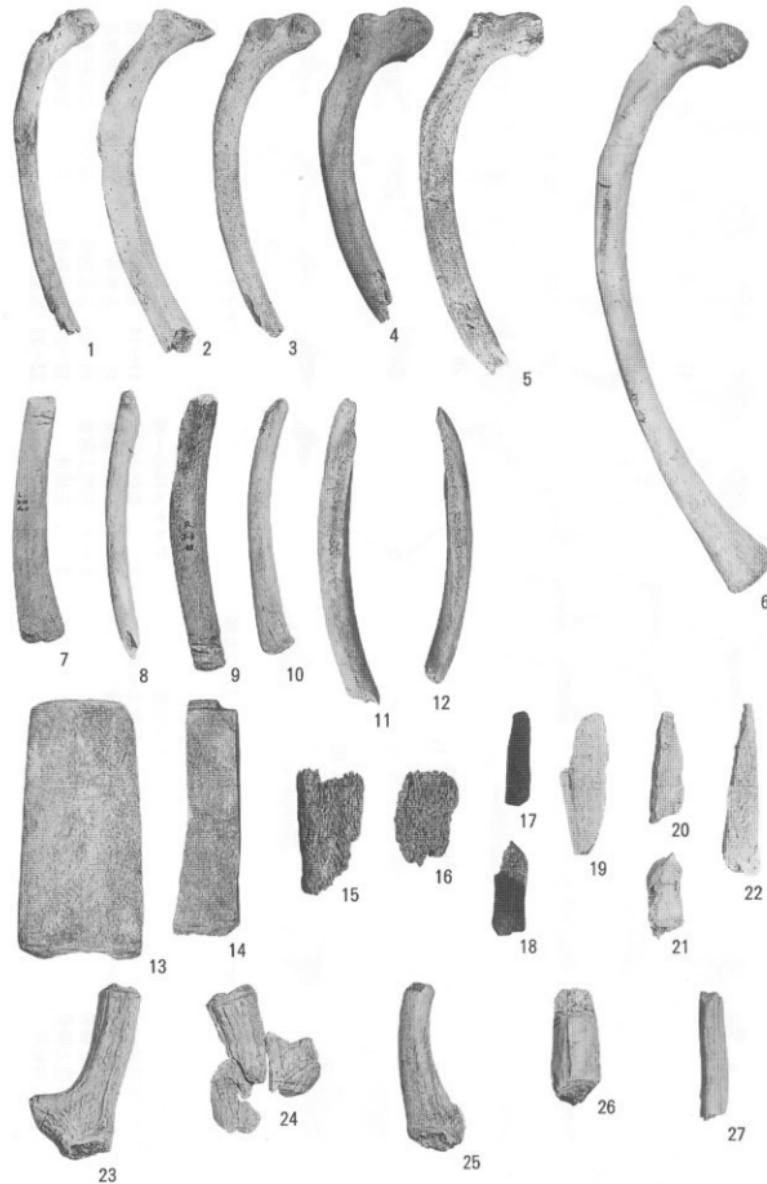
貝塚出土土器 (4)・鉄製品



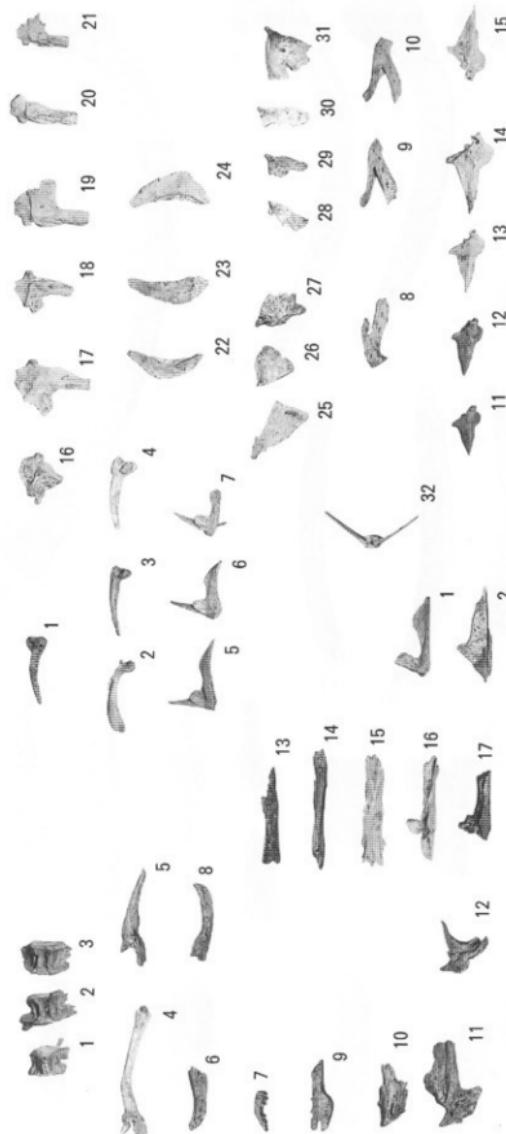
銛頭・アシカ肋骨製 (1~3)・半裁鹿角枝 (4~12)・鹿角をそのまま使う (13~15)
銛頭未成品 (16~22)・中柄・鯨骨製 (23~35)



中柄・鯨骨製(36・37)・鹿角製(38)・シカ中足骨製(39～41)・中柄未成品・二重かさね鳥骨製(42)
アシカ肺骨製(43)・その他(44～64)・ヤス状刺突具(65～73)・鳥骨製骨針(74・75)・有栓彌型鹿角製品(76～78)



切断もしくは切り込み加工痕をもつ骨角資料



魚骨(1)

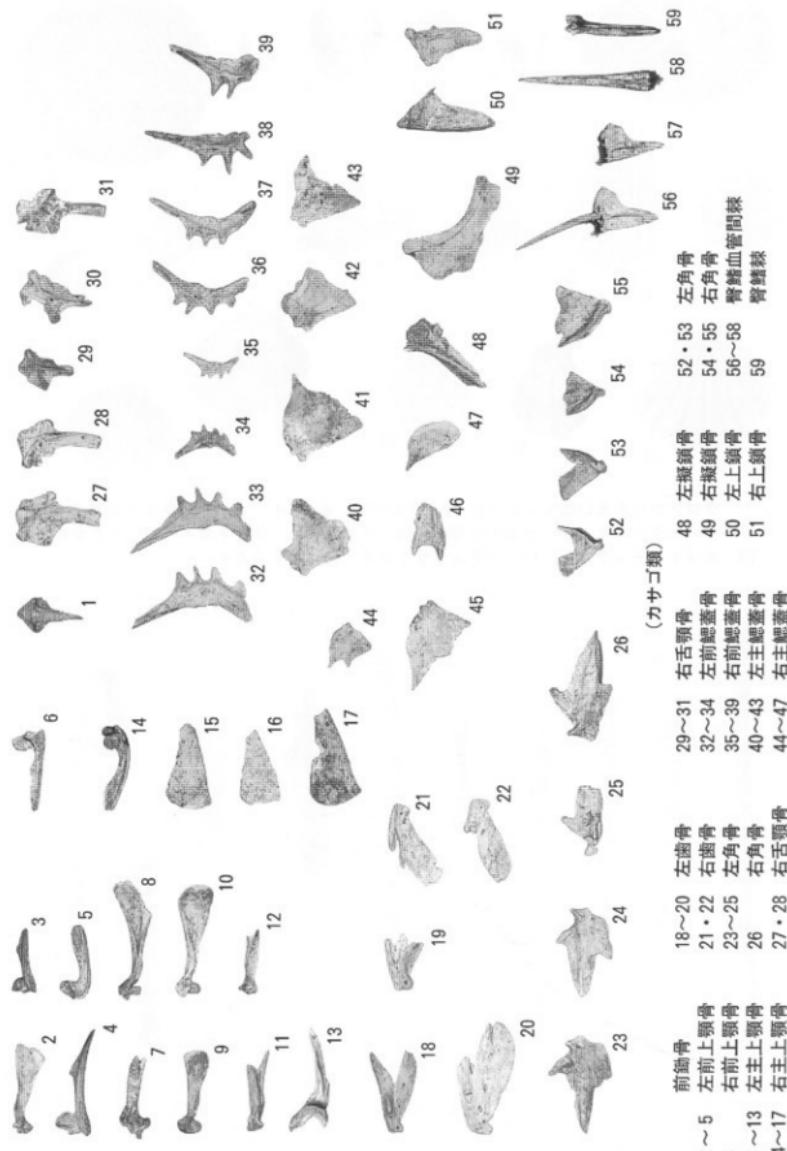
(マダラ) (カジカ類) (アイナメ科の一種)

マダラ 1～3 尾椎骨 11・12 右角骨 11～14 左角骨
4・5 右主上頸骨 13～16 副蝶形骨 15 右前上頸骨
6・7 右前上頸骨 8 右角骨 2～4 左主上頸骨
8 右前上頸骨 9 右齒骨 5～7 左前上頸骨
9・10 右齒骨片 10 左齒骨 8 左舌頸骨
11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

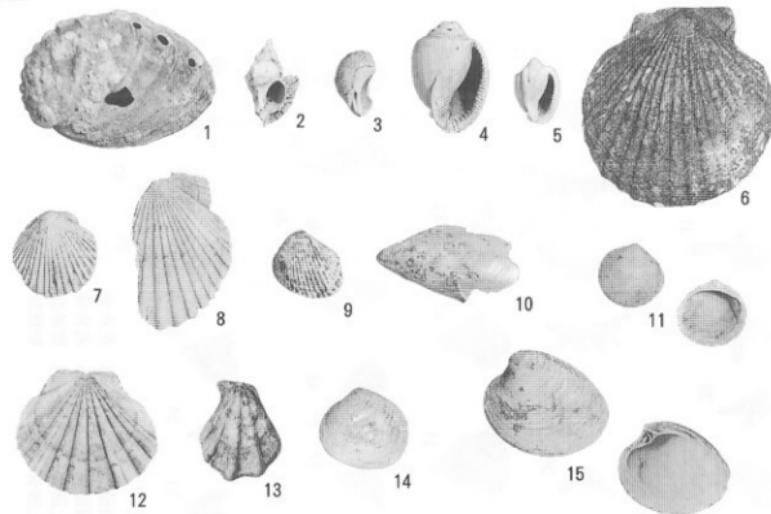
カジカ類 1 左前上頸骨 1 左前上頸骨 24 右前鰓蓋骨
2 右角骨 15 右角骨 25～27 左主鰓蓋骨
32 16～18 左前上頸骨 28～31 右主鰓蓋骨
9・10 19～21 右舌頸骨 32 尾椎骨
22・23 左前鰓蓋骨

(アイナメ科の一種)

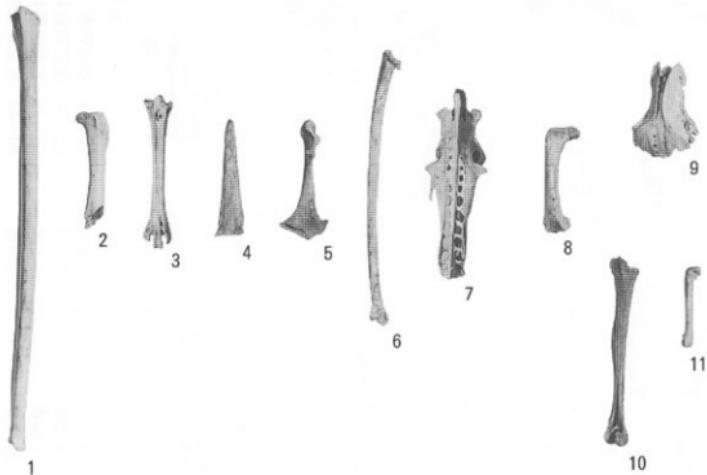
右前鰓蓋骨
左主鰓蓋骨
右主鰓蓋骨
尾椎骨



図版 12



1 クロアワビあるいはエゾアワビ 2 ヒレガイ 3 バイ 4・5 ウラシマガイ
6~8 ホタテガイ 9 サルボウガイ 10 イガイ 11 タマキガイ 12 イタヤガイ
13 エゾキンチャクガイ 14 ウチムラサキガイ 15 ピノスガイ

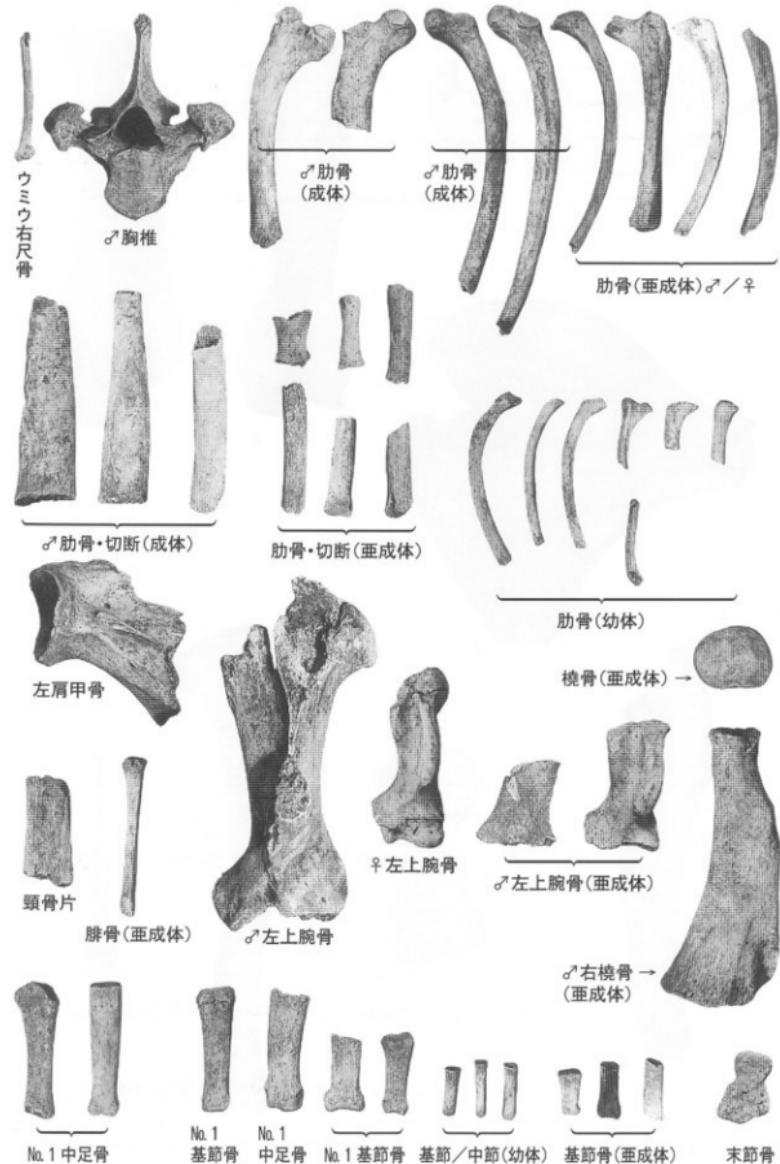


1 アホウドリ右尺骨 2 アホウドリ右大腿骨 3 アホウドリ左中足骨 4 ウミウ上嘴
5 ウミウ鴟口骨 6 ウミウ左尺骨 7 ウミウ寛骨 8 ウミウ右大腿骨 9 カラス寛骨
10 カラス左脛骨 11 ウミガラス左上腕骨

貝殻・鳥骨



1 ♂左下顎骨 2 左肩甲骨 3 右上腕骨 4 左橈骨 5 右尺骨 6 右寛骨
7 右大腿骨 8 隱茎骨



L-10区 アシカ骨一括資料：アシカ遺体の出土状況の一例を示した。多くの肋骨が主をなし、主要四肢骨が少量含まれた。なお、細片がこの他にもある。

青苗貝塚における骨角器と動物遺体

～青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告～

2003年3月発行

発 行 奥尻町教育委員会
北海道奥尻郡奥尻町字奥尻317番地地先
☎ 01397 (2) 3890

印 刷 (株)長門出版社印刷部
北海道函館市日乃出町11番13号
☎ 0138 (52) 2461
